
武器シリーズ

久楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武器シリーズ

【Zコード】

Z2161BA

【作者名】

久楽

【あらすじ】

いくつもの世界が存在する内の『黄昏庭』、武器のお医者さんレノン＝ホールと、彼の元に全世界から運び込まれる異常をきたした武器のお話。

武器力タルカタル

魔術軸第三分岐第六世界『黄昏庭』たそがれにわ。

その世界は、たつた一つの大陸にたつた一つの国。國民達は争いを好まず、極めて平和に平和に暮らしていました。言つてしまえば、？心？がなかつたのです。

こう改善してみよう、とか今の方ではここがいけないとと思う心が。

だから自然科学は勿論、魔術軸にありながらも魔術もほとんど発展していません。

この国は『タソガレ』と呼ばれます。

『黄昏王国』でも、『黄昏国』でもなく『タソガレ』。

タソガレには四季が無く、雪は降らず、焼けるよつた灼熱の太陽もありません。

農業を続けていれば飢えることもないこの世界では、人間同士の戦は過去の話となり、戦と言えばいつのころから現れた魔物との戦を表すようになつていきました。

同時にこの国は、魔術軸のみならず他の軸にある異世界とも交流し、変わり者が異世界の文化・書籍や日用品を取り入れたりもしていました。

この国では、異世界の存在は一般人にも知られていたのです。

魔術の発展していないと先に申し上げたこの世界で、数人の魔法使いが暮らしています。

異世界から見れば魔術などとはいえない、不格好で不完全な『それ』。

しかしそれは、異世界の誰も持つてはいない奇妙で特殊で目を引くものでもありました。

彼らの《それ》は学問として成立した魔術ではなく、彼らが普通に生活する内に自然と発生したものでしたから、それも当然かもしれません。

Ladies and Gentlemen!

そろそろ始めることにしましょうか！

これから紡ぐは武器と青年と鍛冶師と世界の物語。

武器、カタレカタレ

想いを、悩みを、嘆きを

そして何より大切な所有者を。

彼ら彼ららと共に歩んでいくために。

同じ《世界》にいる為に！

今日お話しする物語の主人公は
『銀の意志』と『蒼き宝』。

二人はここに問いかけをひとつ。

いつまで、あなたと共に歩いていける？

銀色の彼はいつも、いつも思っていました。

いつか別れが来る事を。

だからせめてその時まではと

それでも彼は知っていました。

いつか別れが来る事を。

だからせめてその時まではと

独りきりの世界で考え込みました。

第三の月、十と二日。

王国ほぼ中央に位置した首都ヴィスベルから南東の方向。街の中全てを駆け巡る水路が大きなシンボルとなつた水の街『キーモス』。

そこで気まぐれに学校の先生をしたり、野菜を作つたりして暮らす魔術師がいた。もどきだが。

多くの異世界の本が詰まつた本棚に囲まれて、机に向かう青年の名はレノン＝コール。

キーモスの民には青系統の髪色の者が多いが彼もその例に漏れず、ふわふわとしたどうとも説明のしようのないぼんやりとした空色の髪と、意志の弱そうな濃い海の瞳を持っていた。

その瞳を覆うシルバーの眼鏡は角縁。

ほつそりとした肉のつかないからだに、だぶつとしたジャケット。どこからどう見ても徹夜続きの学者のようで、戦闘技術には疎そうである。

その彼は異世界から持つてきたのであるう万年筆で何かを紙に書き付けていた。

普通この世界で話される言語はこの国で生まれた公用語、フイール語だが書かれていく文字はこれもまた異世界からの輸入もの、漢字である。

「十と二日…レイピアのシユトーナク、修理は順調明日依頼主に返却。えーと…ランスのベリルガント、依頼主は西のワイスのパン屋リンガーロンさん…今日から修理開始、と…」

ぼそぼそとフイール語で言葉に出しながら書き付けていく。

これは彼の数ある癖の一つといえることだった。

一通り書き終わったことを脳内確認、コシコシとペンで机を叩く。快い音だと思う。

「書いておかないと覚えていられない頭だからね、僕の頭つて…」
そうして、換気扇の回る薄暗い部屋で振り返った。

視界に映る埃っぽい部屋、本棚。

本棚にはありとあらゆる、異世界から輸入した本がぎっしりと詰まっている。

一切窓のあけられない密閉された空間。

レノンの視線が噛み合つのは壁際、木箱の中へ入れられた鈍く光る金属だ。

強く意思持つ、彼の愛する金属。

今入っているのは一本。一本は自分の刀、宗久。^{むねひさ}

そしてもう一本が昨日来たばかりの新入りだ。

カタカタ、カタカタ。

静かな部屋によく響くこの音。

彼がここに来た理由である、『独りでに震える』という現象がここでも起り音を生み出していた。

レノンの耳にはこんなところに主と引き離されて連れてこられて、どこか戸惑つているようにも見える。

「これから暫く宜しく、ベリルガント。君がまた働けるようになつたら、すぐにリンガーロンさんのところに返すからね」

その戸惑いを解すためか、レノンは穏やかな声を投げかけた。

パン屋を営むようになるまで王国軍として働いていた…つまりは魔物との戦いを専門として行つていたリンガーロンがここへ持つてきたベリルガントと銘のあるそれは、^{ミリタリーランス}軍用槍だつた。

まっすぐで飾り気のない刃を持つた、百七十センチメートルもないレノンの身長より長い百八センチメートル前後の全長を持つ、シルバーのごくシンプルなランスだ。

ただ戦うことのみを考えた設計、鑑賞用の美しい武器のように飾り立てていない、凛とした鋭い美しさがある。

その装いに不似合いで、刃の本に取り付けられた赤い布がある。血の赤よりもと鮮やかなその布はもう十数年昔にある戦に勝利

した際記念に付けたものだというが、少し古ぼけているだけで大きな破れやほつれは見当たらない。

物が壊れぬよう保護できる力をもつた魔術師がいたはずだから、おそらくその者の力がかかつてているのだろうと推察し、訊いてみるとやはりそうだった。

幾多の戦いを経ても同じ布が残るよつにと術を施してくれたらしい。

ベリルガントと自ら名をつけたこのランスと、何百、何千もの戦いを共に生き抜いてきたと語るリンクガーロンの口調は誇らしげで、レノンはそこに自分と宗久の間にある一種の信頼関係のよつなものを感じ取つた。

暫くベリルガントを見てそんな経緯を思つた後、レノンは紙を巻いてぱんぱんと膝を払いながら立ち上がる。

もう昼が近いが、朝に来るよう呼んでおいた友が来ない。

友は親子五代続くという馴染みの鍛冶師で、新しい武器がやつてきた時『外部的な傷み』がないかいつも診てもらつていた。

レノンが診ることができるのは、『内面の傷み』のみで、彼に鍛冶師の心得はない。

困つたもんだねえとぼやき、その友人の家であるこの街唯一の鍛冶屋へ向かつた。

何度来てもむつとするような熱氣には慣れない。

レノンはふと、異世界の夏といつのはこんな感じよりむつと熱いのかなと思つ。

鉄を打つ音が聞こえ、彼の父に挨拶をして奥へ入る。

勝手知つたるなんとやらで、勝手にすかずか入つていが常だつた。

「ジョシュア……ジョーシューア……」

危ない危ないと注意されるので余り炉には近付かず声を張り上げて呼ぶと、ううん？と唸りのよつた奇妙な返事が返ってくる。

耳を叩きつけてくるよつた金属と金属がぶつかる音と、熱気が益々堪え難くなつた。

赤々と燃える金属を鎧で叩く男の髪は燃えるような赤毛、レノンとは正反対に、焼け焦げたりほつれたりした服を着てはいるものとても活動的に見え、捲つた袖から出た腕は筋肉隆々に鍛え上げられていた。

しかし彼は振り向かない。

自分が誰だか解つていなないなと思つたレノンはまた半ば叫ぶよつにして声を出す。

大声を出すのは好きではないのだが、仕方がない。

炉が燃える音と金属が叩かれる音で声が消されてしまつ。

「ジョシュア！－朝の呼び出し、忘れたかい！？」

その言葉によつやく合点いつたように、びくんと彼の肩がふるえた。

「レノン！？」

あたふた、と鎧が冷却用の水に浸されると暖められたものが急速に冷えて白い蒸気が一気に上がり、音を立てる。

打たれていた金属はそのまま置かれそれからはゆるやかに冷却体制に移つた。

そうしておいて額に浮きだした汗を首にかけたタオルでぬぐつて、ようやく振り向き目を合わせた。燃えるような赤い目は、ジョシュアの一族の男性が皆引き継ぐ色なのだとレノンは知つていた。その目の色が特別魔力が強いことを表す世界があることもレノンは知つていたが、今のところ、彼に魔術の素質はないと判断していた。

「いやーマジ悪い。つい仕事で忘れてた」

「毎日忙しいところ悪いけど、僕もジョシュアしか近くに鍛冶屋がないんでね。頼むよ」

男、ジョシュア＝エビルソンは長年の付き合いだけにすぐに頷い

た。

「よつしゃ、行こう。だけど一ヶ月前みたいに瀕死の剣を押し付けられても困るぞ」

「いや、今回はジョシュアも喜ぶんじゃないかな。綺麗なランスだから」

一ヶ月前緊急でやつてきた剣はそりゃあもつす「か」つたのだ。

刃が真つ二つ、装飾玉も割っていた。

何でも魔物と戦っているとそれまで傷一つなかつたそれが突然折れた。外面は勿論、内面も瀕死の重体だつたがジョシュアの素晴らしい働きによつて刃も玉も戻つたし、魂もレノンが修復に成功した為今は無事依頼主の許へ帰つている。

しかしその剣を丸一晩かかつて修復した後、ジョシュアが言つたのは『もう勘弁して下さい…』のみでその後ぶつ倒れた。

それほど酷い損傷を受けた剣をまた押しつけられないかと心配しているのだろう。

その友は、綺麗なランスだと告げるレノンの声に顔を輝かせた。

「ああよかつた!! また殺されるかと思つた…」

「相当嫌だつたらしいね…」

少し小高い所にある鍛冶屋を出、下つていく。

六番水路の傍がレノンの家、鍛冶屋に近い側から一番水路、二番水路…となつていて、今ようやく一番水路に差し掛かつたところだつた。

今日もいつものよつと空はぼんやりと青く、温かい風が吹いている。

「お前のせいでもある。あんだけ壊れてるものになるべく他の金属を使わずに直せだなんて無茶もほどこにしどけて」

いかにもげんなり、といつた調子で言つた彼に、あははと笑いながら答える。

「うん、ごめん。でもジョシュアも武器の気持ちになつて考えてよ。……自分の体に、得体の知れない何かが融合するんだよ?」

ジョシュアは言葉に一瞬虚を突かれた顔をして、ああこうこうとかと得心いつたようだつた。

「でも、他世界にや『臓器移植』だとか『人工心臓』つて技術があるらしいぞ？それについてはレノン先生はどうお考えですか？」
対してレノンは茶化すように言つた彼の腰、服の裾をくいと引っ張る。

途端に彼は歩いていたペースを崩した。

どうにもいつもペースを奪われがちなレノンは彼の調子を物理的にではあるが崩してやつたことで、してやつたりとせりと笑む。「この世界にはないけどね。……僕は嫌だよ、そんな自分と他との境がわからなくなるの」

途端に陰を帯びたレノンの顔に、普段彼が常に温厚な笑みを浮かべるかぼーつとしているのを見慣れているのと、彼の事情を知っているので事の重大さに気が付き、げ、地雷踏んだかな？とジョシュアがあせつたちょうどその時。

「レノンせんせーい！…」

前からピンクのリボンが目立つ女の子が走つてくる。

「ゾフィーヌ！もう帰つていたんですね。お帰りなさい」

彼女を認めるトレノンの顔は目に見えてぱつと明るくなり、駆け寄る彼女に腰を屈めて身長を合わせた。

「ジョシュアお兄ちゃんもこんにちは！」

「おう、お帰り」

くくりくりした、モモやイチゴの飴玉のように綺麗な桃色の目で見上げてくる彼女、ゾフィーヌはトレノンともう数名の教員で教える学校の生徒で、今年八歳の二年生。

数字に強くすぐに四則計算を習得してしまい、意欲もあるので先生たちも彼女はきっと異世界へ頻繁に渡るような識者になるのではと思っていた。（この世界では珍しい人種だ。『意欲』があるというのは）

その彼女は先週から南の牧羊地帯にある祖母の家へ旅行に行つて

いた。

船を除き鉄道等、他の世界に存在する移動手段の殆どがないタソ

ガレでは旅行はなかなかの大仕事になる。

「途中で怪我はしませんでしたか？」

「うん、大丈夫！羊さんがいーっぱいいてね、もこもこしてた！」

牧羊は南の地域で主に行われていて、この近くでは殆ど見られない。

彼女はいい経験をしてきたようだ、と思つてレノンは笑つた。

「それはよかつたですね。羊って近くで見ると大きいでしょ？」

「うん！思つてたよりずっと大きかつた！でね、これお土産！」

差し出された袋をジョシュアと共にのぞいてみると美味しそうなエクレアがあつた。

「わあ、おいしそう。ありがとうございます」

につこり笑つて礼をいえば、ゾフィーヌもうれしそうにした。

「じゃあね、先生！また明日ね！」

今日は休日だが明日は学校がある日だ。

「はい、また明日」

ばいばーい！と元気に手を振る彼女に眼鏡の奥、柔軟な笑みを浮かべてレノンは手を振りながら立ち上がる。

第四水路の傍にある家へ帰つていく彼女を見えなくなるまで一人で見送つた。

「うちで食べようか、エクレア」

「ん？おう。つーか…」

何？と見上げてくる背の低い友にジョシュアは呟く。

「お前、俺に対してだけ話し方違うよな？」

「気のせいだよ」

いいや絶対に気のせいじゃない、と思いつながらジョシュアは先行く友の背を追つた。

レノンの家は決して狭い訳ではない。

なのに激しい圧迫感を覚えるのは何故か。答えは一つ。

物が多すぎるのだ。

「なあ、また物増えたか？」

以前来たときには見なかつた花瓶やら置物やらが視界に入るのでそうジョシュアが訊くと、あつさりと友は頷く。

「いまや、世界を越えてお密さんがやつてくるよ」になつちゃつたよ

「『前代未聞、武器のお医者さん』ってか？」

その言葉にレノンは苦笑を返す。

「僕にはそんなつもりはないんだけどね……ただ話を聞いてるだけだし。でも他の世界にも武器と話せるなんて変人はいないみたいだ。つと、じゃあこれ皿とフォーク」

差し出されたそれを受け取り、箱からエクレアを皿へ移したジョシュアはまた訊いた。

「で、ランスは？」

「あれだよ。名前はベリルガント。旧型のミリタリーランスを個人用に基礎から作りなおしたものだと思うんだけど……当たつてる？」

「ああ、その通りだ」

二人とも銀のランスに視線をやりながらパクリとかぶりつく。甘い。当然だが甘い。

生クリームとカスタード、二つのクリームが入っているようだ、さすがは酪農盛んな南の土産だけあって濃厚な味わいであります。言葉では言い表せないねこれは、とレノンは思った。

このエクレアがもたらした時間は、ジョシュアにとつてもレノンにとつても至福のひと時だつた。

「このあまり似ていない二人の共通点は甘ーい菓子が大好きだとうところにある。

「四十五年昔のスタンダードランス、E-2nd^{イーセカンド}が基礎だろうが……随分いじくりまわしてるな。ウリの軽量が影も形もありやしない。使つてゐ、いや使つてた人はどえらい剛力だろう？」

レノンはエクレアをフォークで小さくしてから口へ運びながら、依頼主…リンガーロンを思い出し、そつだねと笑った。

第一線を退いて尚、リンガーロンは如何にも戦いの似合つ男といった体つきをしていた。

短い「ワワワ」とした茶の髪に鋭い茶の瞳。

頬に傷があり一見とても恐ろしいが、話してみると氣さくな人だつた。

「…おそらくそうだと思うよ」

「え? 何、バケモンみたいな人なのか?」

その問いに、うん、それに近いとレノンは返す。

「え……と妙な動搖があつたらしいジョシュアはしかし、すぐに再びベルルガントへ目をやつた。

「よかつたじやねえかお前。E - 2ndなんてそつけない名前じやなくてカツコイイ名前つけてもらえてよ。ベルルガントの方がよっぽど男前だぜ」

「あれ? 男かどうかなんてまだ僕にもわからないよ?」

「いいや、絶対男だ。この厳めしい作りからして野郎っぽさがマンマンだろ?」

ははつと笑つたジョシュアはすでにエクレアを食べ終わつて、からんとフォークを皿の上へ投げ出した。

立ち上がりつてベルルガントのもとへ向かう。

「綺麗なもんだな全く。よく手入れされてる」

木箱から持ち上げて、軽く両腕を使って振つた。

やはりかなり重いなと顔をしかめる。

「俺が手を出すところはどこもない氣がするぞ。逆に悪くするのが関の山だ。刃も傷んでないようだし…柄もまだ十年は持つと見た」

「どこも直すところがないのはいいことだね。でもわざわざ来てもらつたのに、御免」

「や、別にいい。面白いもの見せてもらつたし、エクレアも食えたしな」

そう言つて、ジョシュアは仕事も忙しいだろつ」一向に立つ氣配を見せない。

とうとう、沈黙に業を煮やしてレノンが問つた。

「……もしかして話を聞きたいの？明日でも聞かせてあげるのに」「ここで待つてりやすぐ聞けるだろ？ベリルガントは久しぶりに興味の持てる武器なわけだしな」

早くやつてみろよと言われ、レノンは最後一口のHクレアを食べてフォークと皿を置いた。

再び木箱に戻されたベリルガントに歩み寄る。

「まあいいけどね……じゃあ、君の話を聞こうかな。ベリルガント」

銀の柄に触れる。瞼を閉じれば一瞬で闇が来る。

同時に魂が震えるような例の感覚が来た。

次に視界が晴れると、周囲は奇妙な世界だった。

広い広い世界、そのどこにも動物が見当たらないのに、その他は現実の世界と全く変わらないのだから奇妙という他ない。

声も聞こえない。

ある音は風の音だけ。

爪痕のある樹。

殺伐とした風景。

金属臭。

遠く眼前、風で巻き上がる砂煙。

何処までも続く、固い大地。

人がいなのは当然だ。ここはベリルガントの世界。

「成程……いくら持ち主が引退しても、ベリルガントの世界はやっぱり魔物との戦場なんだね」

眩き、歩く。

どうやらこの様子では、多くの《武器》達の世界同様彼を探さね

ばならないらしい。

何のことはない。

『』の世界で出会える『人』、それが間違いなくベリルガントだ。

「さて、どこにいるのかな」

探す事は簡単でも、歩いて辿り着くのに時間がかかるだろうなあとレノンは思った。

暫く行つた。多少疲れを覚える頃、森の中で開けた場所があつた。木が切り倒され、広場のようになつてているのだ。

そしてそこに、一人の人物が立つていた。

鋼の色、シルバーの直毛。

射抜くような明るいシルバーの瞳。

黒いハンチング帽を被り、飾り気のない灰のマントを着ていかにも戦士らしく、同時に狩人のようにも見える姿。

森の縁の中映える、少し年月を経て見える『長い赤のマフラーを首に巻いた』中年から初老の男。

彼は不思議そうな視線をこちらへよこしていた。

間違いようもない。

「ベリルガントですね」

「……ああ。驚いたな。本当に武器と話をする人間がいるとは、『』のガーロンによく似た、低く淒味のある声だつた。

「どんな仕組みでこんなことができる？」

「僕が聞きたいですよ。生まれつき出来たんです。武器に触れるだけ

ベリルガントの意外な質問に、レノンは苦笑しながら答えた。

「どうとしか言いようがないのだから仕方ない。」

本題に入った。

「『』さんはあなたを僕の所に連れてきた時に、『全体が力

タカタと独りでに鳴るし、どうも握つてみても変なんだ』と言つた

んです。握つた時の感触がおかしいって。何か心当たりは？」

そう訊かれベリルガントは、可笑しそうに笑つた。

「なんだ、悩みが『体』に反映されることがあるのか？」

「ええ、ありますよ。僕がそういう話を聞いて、やることはたつた一つなんです。ただあなたのような武器の『魂』に話を聞く」と。それだけで、武器の『体』は大きく変わりますから」

「成程。俺達は同胞とも所持者とも、誰とも話ができないからな。お前を除いてはらしいが。人間風に言えばストレスといつやつか？」
「かもしれませんねえ。ともかく、ただこうして僕と話すだけで大概は異常が治つてしまつんです。だから何か悩みがあるなら話してみませんか」

ベリルガントは暫く沈黙していたが、それもいいかも知れないと思つたか、座れと心地いい短い草の生えた大地へ座ることを促す。荒野の中でこの辺りだけにこの芝生のような草が生えていた。

レノンはそれに従つて彼と隣合つて座る。

「リングガーロンは、パン屋をやつてるだらつ」

レノンは口を挟まず、続きを待つた。

この場所には人はいない。

動物もいなが植物や風や空、太陽は全く本当の世界そのもので、温かい風が吹いている。

ただ、あえて言つならば、レノンはこの世界に理由の分からぬ悲しさを抱いていた。

そしてそれがベリルガントの『心』が反映された結果だとも知つていた。

「もう歳なんだし、戦いに出ないのは解る。その方が安全でいいとも思つ。だが……俺は本当の意味で納得できなかつた」

この世界の青い空を眺めてベリルガントは笑う。

「正直馬鹿らしいとは思つ。あいつが楽しそうにパンを焼いて、買ひに来た客に誇らしげにそれを手渡すのを見るのも楽しい。だが、俺はまだリングガーロンに……俺を使って欲しいんだ。使わなくても、ただ触れるだけでもいい。そう遠くないうちに俺とリングガーロンは

引き離される

武器達になると、人間にあるもの。

それは寿命だ。

武器は『体』的に見れば死ぬことはない。

何度だって造り替えられる。

『魂』を見れば別だが、それでもその寿命は大概とてつもなく長い。しかし人間は、死んでしまう。

「そうやつて俺が焦つてるうちも、俺はずーっと壁に立てかけられたまま……リンガーロンは俺のことを気にかけもしてないようだつた。ここ数日を除いてな」

「寂しかったんですね」

レノンはここで口を挟んだ。

「怖かったんですね。一人だけで、この世界に取り残されるのが。もつと正確に言えばリンガーロンさんじやない誰かに、自分が使われることが」

随分手酷く急所を突くな、とまた笑んだベリルガント。

すいませんねと謝るレノン。

ベリルガントは発言の割には気にした風のない表情、続ける。

「そうだな……俺には、他の誰でもいけないんだ。俺に名をくれ、この布を巻いてくれたリンガーロンしか駄目らしいんだ。共に戦場を駆けたあいつでないと」

そう言って、笑いながらベリルガントは昔を思い出した。

幾度となく、幾度となく彼と共に……どんな魔物とも戦つた。幾度となくこの体は壊れたけれど、それでも幸いだつたのだ。彼と戦い続けた日々は。

その始まりの、『昔』を思い出す。

「ほら、出来たよ」

馴染みの鍛冶屋である男から、改造されすでにE - 2 ndではなく全く別の存在となつた、まだ名のなかつたベルリガントが使い手となる男、リングガーロンへ渡される。

「……うお。こいつあ もうE - 2 ndじゃねえな！」

「あんたが滅茶苦茶な注文すんのが悪い。御代もたつぱり頂いとくよ。名前をつけてやつちやどうだい？もう全く別の槍だからね」

そう言われて、いつも即決のリングガーロンが少しだけ迷つて、でもやはり即、決めた。

「じゃあ、ベリルガントにしよう。柄にでも彫つといてくれ」

もう一度リングガーロンの手から鍛冶師の手に槍、ベリルガントは戻る。

その手の中から彼が見上げた主は、とても嬉しそうだつた。

何故だか知らないが、その時ベリルガントも共に嬉しくなつた。

「意味とか、あるのかい？」

「ないさ。音感。ベリルガントって名が俺には呼びやすいんだ。かっこいいだろ？」

そう言つてリングガーロンが笑つた。

はつはつは、と豪快に。

「きっと何度も呼ぶ名だ、意味なんかに拘つて呼びにくい名をつけ るよりは、呼びやすい名の方がいいだろ？」よろしくなベリルガント

ト

そう言つてリングガーロンのでかい手が、柄をなでた。

それが、ベリルガントの知つているリングガーロンの最初の姿。

それからベルリガントはずつとずつとリングガーロンの傍にいた。共に戦場を駆けた。

苦楽を共にした。

血のついた刃を拭つてくれたのは彼だ。

傷む度に手入れを惜しまなかつたのは彼だ。

いつの間にか、三十数歳だった彼は老いた。

五十歳で退役した。

それでも傍にと思った。

彼はいつからか、自分よりもパンや客にかかりきりになった。
それが耐え難かった。

彼の妻よりも、娘よりも、ずっと彼を知っているという自信があった。

それでも、言葉一つ、伝えることはできなくて。
感謝の言葉も何もかもを伝えることはできなくて。
ただリンガーロンは一方的に与え続けてくれるだけで。

「人間だったなら、俺はリンガーロンに言葉を伝えられた」
「……そうですね」

唐突な言葉に、問い合わせてくるかと思ったが彼は問い合わせなかつた。

ただ、受け入れて返答した。

「俺が人間だったなら、俺はリンガーロンと対等であれただろうな。
ただ全てを与えるだけの存在ではなく。俺はリンガーロンに戦場という居場所を与えた。魔物を奴と共に倒し、人々に感謝されて存在価値を与えた。大切に手入れされ慈しみを与えた。
だが俺は自身の言葉で感謝を伝えることも、奴に戦場以外の世界を与えることもできなかつた。俺に出来たのは、魔物を倒す手伝いのみだつた」

「ええ、そうでしょうね。でも」

ひよい、と水色の頭が立ちあがつた。

眼鏡の奥の瞳は相変わらずぼーっとして掴みどころがない。

「あなたの考えは正しい。間違っていない。だから言います

「振り返りと、笑みが降った。

「あなたが人間であつたと仮定します。もしもあなたが人間であつたら、確かにあなたはリングガーロンさんに言葉を伝えられたでしょう。しかし……あなたがリングガーロンさんと出会える確証がどこにありますか。絶対に出会えていた、そんな風に断言できる人は存在しない。だから僕は言います。あなたは、ミリタリーランスとして生まれてよかつた」

今まで出会つてきた武器達のことを思い、レノンは笑う。

「自分の身を悔やまないで下さい。だつてあなたは、大好きなリングガーロンさんに……槍として生まれたから出会えたんですよ?」

レノンは手を差し出した。ひどく細い、白い指。けれどもその手は、確かに何かを掴む為にある。

「もうどうしようもない過去はいいです。今と明日を考えましょう。遠すぎて不安になる未来じゃなく、この手が届く未来を。僕にはあなたの言葉を伝えることができるんです。リングガーロンさんに。僕、僕の魔術は、あなた達武器と使用者の明日を創る力だと思つてゐるんです」

だから、と目の前に手を差し出した。

今なら確証を持つて言える。

彼が震えていたのは、泣いていたのだ。

彼の『魂』も、『体』も。

もうこのまま忘れ去られるのではないかと。

戦いから退いた彼にとつては、自分は過去の遺物なのではないかと。

もう恐れて、忘れられたくなくて泣いていたのだ。

「僕に、あなたとリングガーロンさんが望む明日を創るお手伝いをさせてください。僕に言葉を、托してください。もし一時、あなたがリングガーロンさんに言葉を伝えられる機会を得たらあなたは何を伝えるんです?」

言った。

自分が生まれてきた意味を、今のレノンは知っている。リングガーロンはあなたを忘れたりしないと伝える為に、言った。

「あなたの言葉を伝えてください。戦場を駆ける銀の意志よ」

ジョシュアはただ眺めていた。それしかすることはない。

レノンはベリルガントの柄に触れ、そのまま目を閉じている。ただ目を閉じているように見える。

でも、そうすることによりベリルガントと会話しているのだ。昔は手を触れてみた。搖すつてみた。

しかし何も起こりはしない。

ただただ眠るように目を閉じ、静かに呼吸を繰り返しているだけ。彼の魂は奥深くまで潜り、ベリルガントと『会話』している。

「ほんと、変な奴だよなあ」

咳きは部屋に染み込んで消えてゆく。

その時つづらと、ゆっくりとレノンの目が開く。

「レノン…」

「ああ、ただいまジョシュア」

ふるふる、と頭をはつきりさせる為か水色の頭が震われた。

「ありがとう、ベリルガント」

柄を撫でながら、銀のランスに礼を。

どうだつたよ、とジョシュアに問われてレノンは苦笑。

「うん。ベリルガントはとても、とてもいい人だつたよ。リングガーロンさんとよく似た人だつた。今も、まだ戦つている人だつた」

ジョシュアがその言葉の意味を計りかねているうちに、レノンは言った。

「さて、リングガーロンさんを呼ばなきやね。もうベリルガントが泣

くことはないから

来た時には木箱の中、あれほどカタカタ鳴っていたその体は全く動かなくなっていた。

一晩様子を見ての翌日。リンガーロンが来た。

「おはようございます」

「ベリルガントは直ったかい？先生」

リンガーロンは開口一番そう言つた。

だからレノンは前に両腕を出して振つた。

「いやいやだから先生はやめてください。今の僕は学校の先生じゃないんです。もちろん医者でもね」

レノンと呼んでください。そう前置きして、続ける。

「ベリルガントと話をしました。彼はですね、寂しかったんですね？」とリンガーロンの表情が訝しげになる。

レノンは、手を前で合わせる。

さながら祈りのポーズのように指をからめ合わせて。

「こここのところパンにかかりきりだつたんですね？」

そう聞けば、リンガーロンは恥ずかしげに苦笑した。

「こんな大男がパン作りなんてと思うだろ？」

「いいえ、リンガーロンさんなら美味しいパンを焼くんでしょうね。手が、優しい人ですから。……えつとそうじゃなく。つまりはそれでベリルガントは寂しかったんですね。魔物討伐の軍を退役して、もう戦場へ出ることもなくなつた。自分をあなたが見てくれる機会はもう訪れないんじゃないかつて。もうこのまま、あなたに忘れ去られてしまうんじゃないかつて。そう思つて、泣いていたんですね」

話が進むたび、リンガーロンが目を見開くのが分かつた。

「ああやつて鳴つてたのが、泣いてたつてことか？」

「ええ、そうですね」

リングガーロンは苦笑ではなく、豪快に笑った。

その突然さにはレノンもびっくりする。

ひとしきり笑って、リングガーロンは言った。

「案外馬鹿だなあこいつも。俺に似たのかもしけねえが」

今ベリルガントは刃を布に巻かれた状態でリングガーロンの手の中にある。

「俺だつてまだ戦場にいてえさ。でもよ、考えてもみろ」

リングガーロンは、遙か果てにある戦場を見ているようだつた。
「俺がもし、誰も傍にいない状態で魔物に殺されてみろ。ベリルガントはどうなる？俺の体と一緒に錆びて、錆びて……んで壊れんのか？それがあんまりにかわいそうでよ……だからどうせならもう軍をやめて、ゆっくりさせてやるつと思つたんだ」

何か間違つてたんだな俺、と言つリングガーロンに、いいえ、とレノンは返す。

「パンにかかりきりになつてた所はあるな。面白くてよ。それでも、俺は一度もベリルガントを忘れたことはなかつた。最高の相棒だからな」

忘れられるはずもない、といつリングガーロンにレノンは笑いかける。

「なあ、ベリルガントはどんな奴だつた？俺に似てたか？」

レノンは、彼を思い浮かべて、言った。

「ええ。とてもあなたに似ていました。あなたのようになに豪快に笑う人で、あなたのようになに大きな心を持つ人で、あなたのようになに戦場が似合う人で」

ふふ、と。

「あなたのようになによく物事を考えられる人でした。直毛の銀髪と銀の瞳で、あなたとよく似た低い声で、あなたにとつての幸せを純粋に考えている人でした」

そうか、とリングガーロンも嬉しそうに笑つた。

だからレノンは続ける。

「僕からのお願いです。パンのことは大好きでいてください。……でも、時々はベリルガントに触れてください。忘れていいないと教える為に。それから……」

リンガーロンはただレノンの方を見る事で先を促す。レノンはリンガーロンの向こうへ、窓、更に向こうのうすぼんやりとした空を見て言った。

「ベリルガントより、伝言を仰せつかりました」

昨日行つた世界を思いだした。
うすぼんやりとした空に、固い大地。

青々と茂る樹。

ベリルガント、彼にとつての世界は主と共に駆けた戦場だった。その世界はこれから変わるのだろうかと思った。

これからあの世界が、パン屋さんの平和な空気へと変わるのかと。リンガーロンが、ベリルガントの世界をパン屋へと変えることのできる人ならいいと思った。

……同じ世界を見られること、それはきっと幸いなことですから。戦場を駆けた銀の意志を、貫きの意志であった彼の言葉を思い出す。

「『あなたが幸せである世界に、俺がいられる』こと。それがただ一つの望む事だ』と

「なあ、ベリルガント。戦つてしまつついなあ

(.....)

「でも俺は、お前でよかつたよ。俺にはお前がぴったりだ」

(ああ、これからもお前の力となる。必ず。)

「退役したら、料理でもしよう。それで家族と幸せに暮らそう。」

「子供たちに、お前と俺の武勇伝を語つてやろう。俺とお前がどれだけ最高のコンビだったか教えてやろう。だからその武勇、これから作りに行こう」

(……お前にとつて、それが幸せならば)

戦士と銀の意志、共に駆けた戦場。

駆け抜けて、駆け抜けて、駆け抜けた。

だからゆづくつと歩むことに歩幅が合わなかつただけ。
お互いがお互いを向いているのなら、きっと
またゆづくつと歩む世界で、歩いて、歩いて、歩こつ。
きつと、同じ世界で歩いてゆける。

「なあ、ベリルガント。家へ帰るか……俺達は、ずっと走り通しだつたろう。だからそろそろゆづくつすることにしよう」

戦士が、言った。

「お前にはゆづくつは難しいんだるうなあ。だから仕方ねえ、俺が会わせてやるわ」

まつ泣くのをやめたはずの槍が、震えた気がした。

(一 緒に)

(歩いていく、か。)

青い彼はずつとずつと考えていました。

赤い主人の苦悩を。世界で一人きり、孤独である彼のことを。

青い彼にとつては『世界』に一人でも、やっぱり赤い主人とその黒い相棒がずっと傍にいましたから、寂しくは無かつたのですが……。

青い彼は、主人にとつて楽しいことをずつとずつと考えていました。

楽しいことが大好きな、主人の為に。

楽しい世界を、主人と一緒に作る為に。

やつぱり変わらずぼんやりと暖かい日差しの差す、キーモス六番水路沿い、レノンの家、仕事部屋兼応接間兼生活スペース兼書斎兼ジョシュアとのお話部屋。

レノンはメロンパンを食べながら、手紙を読んでいた。

幸いなことに漢字（と仮名）で書かれている為、読める。

「『剣の名は青宝絶音、度々、輪郭がぶれるような奇妙な症状が起ります。聞くより一日見てもらえば早いと思いますので本日そちらへ向かわせていただきます』……か。輪郭がぶれるねえもぐもぐもぐもぐ。咀嚼。

「食つてから喋れ食つてから」

「ごめん」

そういうジョシュアはまたチヨココロネに食いついた。

本日の学校は昨日行われた地域と学校生徒との交流会…小規模な

祭りのような物の振り替え休日、鍛冶屋の仕事もジョシュアの父が一人で行っているため、ジョシュアは休みだ。

「もうベリルガントが帰つてから一週間か。なんか聞いてるか？」

「うん。もう鳴つたりしなくなつたつてさ」

このテーブルを埋め尽くす大量のパンは、リングガーロンからの報酬である。

何を支払つたらいいのかと聞かれ、レノンがパン食べたいですと言つたのでこうなつた。

昨日郵便屋さんが持つてきたばかりのほやほやである。

「リングガーロンさんも考えたねえ。ベリルガントを宣伝に使うとは……」

手紙を読んだところによると、彼は体が動く限りベリルガントを使つて豪快な槍舞を見せて客を呼んでいるらしい。

子どもから大人まで大人氣でなかなかの好評のようだ。

彼の体躯であれだけの勇壮であるベリルガントを振れば、それは見ごたえあるものとなるだろう。

その様子を想像して、レノンはふふと笑つた。

彼の言動に疑問を覚えたジョシュアが、なんだよ?と聞くので、その事を順を追つて説明してやれば、そりやなかなか頭使つたなあ!と感心したようにジョシュアも頷き、笑つた。

「また、見に行かないといけないね」

「ああ、また暇な時にな。お前一人でどこも行かせられねえよ危なつかしくて。……で、その手紙はなんだ?」

「ん?突然の話題転換だね。うん、今白い鳩が持つて来たんだ」

そう聞いて、え?とジョシュアは耳を疑つた。

「嘘だろ?」

伝書鳩という技術は知つてゐるが、この世界には存在しない。

そんな魔術を使う者も知らない。

だからジョシュアは我が耳を疑つたのだ。

「ううん。本当」

まぐ、と更にメロンパンに食いつきながら、その手紙をジョシューの目の前に広げた。

「？」

「差出人」

言われ、縦書きの手紙の一番左の行に印をやつた。

「魔術軸第一分岐第一世界『クインテット』…フェンデラム総合魔術校校長…静桐遊凪つて…ええええオイ！」

魔術軸第一分岐第一世界。

第一分岐という言葉が表わすのは世界の分岐。

この数が同じなら、同一世界の過去未来という関係が成立する。

この『黄昏庭』と『クインテット』は分岐数が違うから全く別の世界だ。

第一世界とはその軸、つまり魔術軸にある世界のうちの世界の強さの順を意味する。

数が小さいほど、魔術軸であれば魔術の威力、精度が高く学問として完成されているということとなり……

「第一世界つて、魔術軸の最高世界じゃねえか！」

「そうだねえ。しかも静桐遊凪つて、クインテットの代表だよ。基準軸と特殊軸を合わせ全ての世界で比較しても、最強つて呼ばれる。炎の魔術を操り、『世界を閉じる』力を持つてる真紅だ」

うわ、とジョシュアは小さく声を上げた。

「副団長のガルフィーと比べてどうよ？」

「比べ物にならないね。第六世界の人間が第一世界の最高に敵うわけないよ」

ガルフィーとはこの世界の炎を手から出す魔法使いだ。王国軍に所属し、魔物と戦っている。

えらいの来ちゃつたなあ、と言葉の割にあまり困った風もなくレノンは頭を搔く。

「そんなどえらい先生も、武器がへそ曲げて困つてんのか？」

「くす、とレノンは笑つた。

「言つたじやない。僕しかこんなことができる人間がいないんだつて。どこから噂を聞いてきたんじやないかな」

まあとりあえず待つてようか、とメロンパン最後の一かけを口に放り込んで、来客を待つた。

その来客がやつて来たのはわずか五分後のことだった。自分とジョシュアが自己紹介し、慌ただしくお出しした「コーヒーを一口飲んでにっこり笑う。

「こりゃ美味しい。『コーヒーにはこだわりがあるとお見受けしたぞ』『ええ。『コーヒー』ニアですかね』見れば見るほど、不思議な男だった。

歳は六十一と聞いたが、十歳は若く見える。

確かに顔に皺は刻まれているがよく変わった表情や瞳に宿つた意思、それに無駄なく鍛え上げられた長身などが、全く老いを感じることを許さないのだ。

髪はレノンのものより鮮やかな空色に、光る紫。

一瞬惑つたがそうとしか形容できないのだ。

銀に紫を塗り重ねたような、メタリックと言えばいいのか、そんな紫が空色の髪にところどころ混ざっている。

その肩を過ぎるなめらかな髪は赤いひもでポニーtailにされている。

瞳は紫陽花を思わせる青紫で、はつきりとは言い表せないが『力』を持った視線を投げかけてくる。

その目は小さな子供のよう、絶えず爛々と輝いていて。着ているのは真つ赤な、目にいたくない程度に彩度の抑えられた丈の長い服。

訊けば向こうの世界の魔道士の普段着である魔道ローブらしい。それに茶のショートブーツ。

身長は百八十センチメートルを超えていた。不思議と背が高いような気がしない出で立ちだつた。

「俺の学校で教える先生にもマニアがいてな。中々舌が肥えてるんだが……でもこいつは美味しいな」

声は脳に染みるよう暖かい。

リングガーロンの地を響かせるような低さではなく、高低の間を行くような微妙な低さで響く声だ。

「ん、そうだこれは土産。うちの相棒に作らせたものだ」
どうぞどうぞ、と差し出された紙袋からそれを取り出してみるとそれは箱に入つた美味しそうなチョコレートのシフォンケーキだった。

「おおお！」

眼前に現れた菓子に、ジョシュアが反応。

レノンは彼の腰をさりげなく殴る。

がつつくなみつともない、との声と共にだ。

大体いつものことなので友も大して気にしない。

「美味しそう。早速切れますね」

うきうきとその箱を開いて、中のケーキにナイフを入れる。

ふわふわとしていかにも美味しいケーキ。

それを皿にのせて手渡し、自分とジョシュアの分も。手を合わせていただきます。

口の中に広がる甘みは至福の瞬間だった。

「おーーしーーー……」

ジョシュアがうつとり、といった。

大の男がケーキでうつとりとしているのはなんとも…とかいうと偏見になるのかなあ、でも似合わないなあとレノンは彼を見て思考。「だろ？だろ？俺もケーキ大好きでなー。自分で作るの面倒くせえから相棒に教え込んで作らせてんだ。こここのことを教えてくれた旧友が、お前さん達がケーキ大好きだつて言つてたから」「美味しいですーありがとうござります本当」

じーん。

美味しいケーキに感動するレノンに、言葉は唐突に投げかけられた。

空間の変化と共に。

遊凧が右腕を何もない空間へ伸ばすと同時に、風がその腕を包むよう巻き起こり、

「！」

大きく湾曲した鋼色の刃を持つ剣だった。

澄んだ深い輝きを放つ、宝石であろう青い玉が柄に埋め込まれ、取り巻くように銀で施された装飾は薫だらうか、あちこちに木イチゴのような塊も見られる。

何か、周囲の空気を重くさせる剣だった。

「こいつが青宝絶音。目に見えぬ音さえも絶つ青き宝、って大層な名のついた剣だ。こいつを見て欲しくてな」

皿を置いてそれを受け取る、と。

「重つ！」

がくん、と体勢が崩れ慌ててもう片方の手もやつて支える。

遊凧があまりに軽々と持つていたので油断したが相当に重い。

「おお悪い。こいつは魔術のかかってる剣でな、他の世界のものとはちょっと違うんだ。自分の魔力を馴染ませると、ものすごく軽くなるんだ。そうしなきゃ普通に重い」

成程なあ、と思いながら刃を見た。

透き通るような美しさを持つた刃だ。

「？」

違和感を感じた。

実際に字面の通り、透き通っている。

「え？」

ぶあん、といった音が似合った。

脈打つように、振れるように、輪郭がブレているのだ。

ブレた部分が透明に透き通って、まるで幽霊のよう。

「それなんだ。困つてんのは」

「苦々しげに遊凪が言いながら、『コーヒーを啜つた。

「俺も自分の世界で全国の名高い魔道士に診させたんだが、原因が全く分からぬ。弱り果ててた時にレノン、お前のことを旧友に教えてもらつてすぐにここへ来たんだ」

レノンは刃を見つめていた。

こんな現象は初めてだなあ、と思いながら。

「頼めるか？」

「ええ、もちろんです」

返答は笑みと共に、横で二つ目のケーキを食べる友人を半目で見た。

「青宝絶音について、なるべく多くのことを教えてくれますか？」

そう訊けば、やや考えるような表情を見せ遊凪は口を開く。

「俺にはもう十八年、一緒に学校を支えてきた相棒がいてな。何年か前に魔道士達の集まりから俺が表彰を受けて別にいらねえ名譽を貰つた時、その相棒が『あんたの為に作ったもんだ』って言つてくれたのがこの青宝絶音だ。その基礎には俺じゃなく相棒の魔力が使われてる」

にい、と笑う。

「俺と相棒の相性がばっちりだから、その魔力で作られてることとの相性もばっちりだと思うぞ。この謎のブレ現象が起るまでは他の剣みたいに折れたり、変にへそ曲げることもなかつたしな」成程成程と忘れっぽい自分を知つてるのでレノンはメモを取ることを忘れない。

「ありがとうございます。必ず元通りにしますね」

「頼む。この状態だと折れたりするんじゃないかと思つて迂闊に使えなくてなあ」

じゃ、悪いけど一回帰るな。できたらこれ押してくれと渡されたのは透明な緑色のプレートだった。

真ん中にある赤いスイッチを押せといふことらしい。

そうしておいて、遊凪は自分の世界へ帰つて行つた。

一方、残された二人。

「……こんな症状は初めてだねえ」

「なあ、レノン」

長い付き合いになる友人だ。大体考へていることは読める。

「押しちや駄目だよ」

「だ、だつてつ……こんな押してくれつて感じの突起具合なんだぞ？俺が押さずに誰が押す？」

「いやいやまだ青宝絶音に会つてすらないし。駄目だからね絶対」
凄く心配なので彼の手からスイッチを奪い取つて自分の近くに置いた。こんな時レノンは友人が愛すべきおバカさんというキヤッチフレーズが似合うのではないかと真剣に考へてしまつ。

いや、流されるなと思い直した。

「じゃあ、早速行つてくるね。直すところもないだろ？」

つまりそれはジョシュアには仕事がないということ。

「あ、じゃあ俺残りのケーキ食べて待つてていいか？」

「……全部食べないでね」

それだけ言い残し、レノンは青宝絶音の刃に触れて、目を閉じた。旅立つた彼を見ながら、ジョシュアは呟く。

「最近、俺いい武器によく逢うよなあ」

うんうん、と頷く。

バランスのとれた美しい青の剣。

この世界にはないタイプの装飾に、恐らく魔力の影響なのだろう、氷のような闇のような冷たい力の印象。

これは恐らく…と思考と共に、その内容をジョシュアはそのまま口に乗せる。

「こいつ、多分『魂』は育ちのいい坊ちゃんじゃないか？俺やレノンぐらいいの」

はつと気が付くと、ひんやりとした空間に立っていた。

「足元を見下ろせば、

「タイル……じゃあここはまさか」

周囲を見渡してみる。

タイルの広い廊下、広々と抜ける空間に部屋の列。

1-Aと書かれたプレートのかかつた部屋。

向こうには1-BやCやDが見え、中には机と椅子の広がる空間。「間違いない、ここが遊凧さんの学校……確かフェンデラムだ」

全体的に、オレンジを強く感じる。

おそらくオレンジが校色なのだな。

探すべき青宝絶音は遊凧の剣だ。つまり

「普通に考えれば、校長室にいるはずだよね」

さて、校長室はどこかなと幸いにもすぐそばにあつた案内板を見て進み始める。

「剣核」

『クインテット』、フェンデラムの校長室で声が生まれていた。

「剣核ー」

「うつせえ黙れ。人が仕事してるんだ」

紙飛行機を折りながら投げかける遊凧の言葉に応える相棒の声はそつけないというより並々ならぬ怒りが込められたもの。

遊凧は気になった風もなく続けた。

「武器と話をするつて、すげえよな」

「あ？ ああ、あの俺に手土産にするから焼けつて突然シフォンケーキ焼かせた件か」

この剣核という男、見かけは多少おつかないが、元から料理が好きだったのと遊凧のお菓子を作らされておりお陰でケーキ、カステ

ラ、大福、ところてん等ありとあらゆる菓子を作りこなすという非常に奇特な五十代男性である。

ちなみにこの校では魔術剣を教えている。

シフォンケーキなどお手のもので、別にそれに対しても怒っている訳ではない。

この、正規魔術教員が一桁しかいない校で寝る間を惜しんで皆動いているのに、わざわざそのまとめ役である教長にケーキを作らせるという暴挙に対しても怒っているのである。

遊凪は相棒の剣幕に全く動じず、言葉を継ぐ。

「あれ？ それ聞いてつと、俺つて酷い奴じゃねえか？ 気のせい？」

「ほほうようやく分かつたか。足りない頭でよくたどり着けたもんだなおい」

その剣核の剣幕にふつと遊凪は笑うと、紙飛行機の羽を広げた。すつと柔らかく飛ばす。

風に乗れないで、紙飛行機は大して飛ばずに墜ちた。
それを見届けて言づ。

「望まずに植えつけられて人を超えた力を得た子らの世界があつて、崩れ落ちる物語に支配された、救世者を欲する悲しい世界があつて、裏表そつくりよく似た神国の存在する世界があつて、誰も彼もが殺し合わなければ成立しない世界があつて、一見平和で、でも確かにそれぞれが過去と闘つている… 大工連中の世界があつて」

一息。

「こんな俺に振り回されて壊れかけて、でもいいやつばかりでみんなが一生懸命な世界があつて」

自分が見てきた全ての世界を

自分が見てきた全ての世界の住人を思つて遊凪は笑つた。

「それだけじゃなく、レノンには見えるんだ。武器達の世界が。武器達、そいつら自身しかいない、そいつのためだけの世界が。青宝絶音の世界はやっぱフェンデラムかな」

ともかくだ、と言づ。

「俺は聞きてえよ。どれだけ悲しい世界があつたら、『神』は満足するんだ? どれだけ悲しい世界を、苦しい世界を作つて皆に苦労させりやどいかにおわします世界を超越した性格悪い絶対神は満足すんだろ?」

「決まつてる」

剣核が初めてまともに返した。

「俺達が、世界中のみんなが狂うまで、世界中の全ての生命が狂つて壊れるまで、満足することなんてねえんだろ?」

求めていた返答だつたか否か、真紅は笑つた。

「皆幸せになればいい。子供だつて願う簡単で純粹な願いだ」

昔と今と未来を想い、言つた。

「なのにどうして、皆が幸せになるのはこんなに大変なんだろ?」

辿り着いた扉の前一つ息を整えて、重厚な扉を押して入つた。
真つ青な長い髪。

長い魔道ロープは紺に近くなつた青。

振り返る、憂いを帯びた氣だるい目もまた青。

「青宝絶音ですね。初めまして。レノンといいます」

「話

「え」

飛び出した言葉はあまりにも唐突だつた。

「話を聞いて、あなたの答えを聞かせて。僕の異常はきっとそれで治るから。お願ひ」

レノンは田をぱちくつとしばたかせて、はいと答えた。

勧められたふわふわのソファーに座つて、話を聞く体勢を作つた。

「僕の主、遊凪さんは天才です。世界の誰も敵わない」
無言で先を促す。

「普通魔術は、膨大な研究と実践によって培われるものです。でも遊凪さんは言葉も話せないうちから自在に術を操れた」

「楽器は弾き方を習うわけでもなく、本能とでもいうようなもので、どんな楽器でもプロ級の演奏ができます」

「記憶力が人外のレベルで、今まで読んだ数えきれないほどの本や全国の詳細な地図は完全に暗記しています。今まで見てきた全ての『景色』も。計算能力も同様で、へたに他人が計算機で計算するよりずっと早く正確に答えを出せます」

「遊凪さんは少しも苦労も努力もせず、ただのんびりと暮しているだけで世界最高の魔道士と認められ、世界の誰も辺り着かなかつた最高の資格に辺り着きました。最高の炎の魔道士としての称号も得ました。最高の剣士としても認められています」

レノンさん、と青宝絶音は言った。

「僕の主、遊凪さんはたった一人で生きていけます。他人が協力しようとも、それは足を引っ張ることにしかならないんです。でも、でも遊凪さんは人として生きることを望みました。だからいつも仕事をサボって、相棒の剣核さんがいないと生きていけないよう見せているんです。『能力的には天才だが、生活能力、行動の面では人より劣る』ことを演じようとしているんです」

「やつすることで、自分の優れた能力を隠して人と共に生きようとすることをどう思いますか？あなたの考えを聞かせてください」

「へへ、と彼は笑った。

「ずっと、誰かに訊いてみたかったんです。僕と、遊凪さんと、遊

凧さんの周りの皆が間違っているのかを

答える為、否、応える為にレノンは口を開く。

「遊凧さんは一人で生きてはいけなかつたんですね。能力的には可能でも、心が」

青宝絶音は黙つている。肯定と受け取つたレノンは続ける。

「遊凧さんが望んだのは、世界の頂点でも、校長先生になることでも、偉い魔道士になることでもなかつたんですね。ただ……ただ普通の幸せを願つただけだつた。恐らくは」

「ただ楽しいことを」

一言が重なつた。

青宝絶音が続ける。

「一人では楽しくないのだと、言いました。世界を楽しくするために、世界を楽しくすることができる人を増やすために学校の先生になつたんです」

うん、とレノンは言った。

「願いは、立場によつて全く違つものですね。大半の人は遊凧さんのように素晴らしい才能を望むでしょ。でも、それを持つている遊凧さんにとってはそれは重荷でしかなく……遊凧さんが望んだのは、ただ普通であること」

レノンは思つた。

随分昔のことを。

こんな奇妙な力など無ければいいと思つた頃を。

そうして破顔。

「僕はいいと思います。それでいいと。責任を持つべき人も持つ必要も存在しないと」

「どうして、そう思いますか？」

「だって」

自分と重ね合わせてしまうのはいけないことだ、と思いながら言

葉を続ける。

「だつて遊凪さんも僕も、同じ人間ですから。遊凪さんにも、僕みたいにへによへによ平和に生きる権利はあるんだと思います。大好きな友達とくだらないこと話し合つて、たまに喧嘩して、美味しいケーキを食べて」

「そつやつて生きる権利が。だつて天才である前に、異端である前に、人間なんですか？」

青宝絶音は何か考え込んだ様子で、口を開いた。

「でも、剣核さんに迷惑をかけることを遊凪さんは気にしてるんです。それでも、誰かを犠牲にしてもいいと言えますか？」

「……だつて、逃げよつとしていませんから」「にい」と。

「聞けば十八年の付き合いになるそうですね。それだけの時間があつたなら逃げたいと思えば逃げられたでしょ。剣核さん、でしたつけ。その方は、どうやつて過ごされてきましたか？」

「……遊凪さんと一緒に、仕事をしていました。どんなに無理難題を吹つ掛けられても、一通り怒鳴つて殴つたら、黙々とそれをクリアしていく人です」

ほり、やつぱりそうだと笑う。

「ね。逃げていない。剣核さんにとっても、それが『幸い』であるんです。剣核さんはきっと自分がちよつと苦労をしても、それが遊凪さんを人間として生かすためならいいと思つてている」

これで、青宝絶音にとつても幸いなのかと思いながら言つた。

「双方が幸いであるならば、それは苦労をかけるとかそんな言葉では表わさない筈ですよ。だから僕は遊凪さんがそうして人として生きよつとする」とは、正解なのだと思います」

その答えで満足だつたか、青宝絶音が笑んだのを見て、よかつたと思つた。

そして、自分の言いたいことを囁つ。

……これも所詮、僕の自己満足ですけれど。でも「ハロ」とことで、武器と使用者の幸いであればいいと思うのだ。

「あなたの言葉を、遊戯さんに伝えたいんです。何か僕に伝えてはくれませんか？主の幸いを願う青き宝よ」

青き宝は思い出す。二人の、やり取りを。

「俺はお前を苦しませるよ、剣核。大体……お前に会わなきゃ俺もここまで強く人間でいたいなんて思わなかつた」

「違いない。だが、お前があの口俺の村に来なきゃ『戦神』せんじんは生まねず、世界は滅んでいたはずだぞ。お前が俺を魔術の世界に引き入れたんだ、せいぜい楽しませて責任は取つてもらおう」

「諦めが、ついたつてか？」

「諦め？んなもん、村を出て『戦神』となつた時にもつてた。普通には死ねないな、つてな」

「そーかい。……じゃああ、せめて俺はお前を犠牲とする代わりに、世界を変えると約束しよう。誰もが楽しい世界を作ると。それが叶わなくとも、少しでも幸いな世界へ近づくよう努力すると」

「その傍らに、それを置いてやつてくれよ。音をえも絶つ、何者にも負けない剣を」

「誰も彼も救おうとした《戦神》と、自分のことしか考えなかつた《真紅》との魔力が共存する刃、か。面白い。じゃあ俺はこの刃で、どれだけのことが成せる?」

心底楽しそうな笑みと共に剣核の口から返つた言葉は、青宝絶音が想像した通りのことだ。

「きっと、お前の手が、声が、魔力が届く範囲……救いが叶う範囲全ての人と物を“すくい”あげるのさ。その刃を、《戦神》を傍に置く《真紅》として使ってみろよ。もう一度と逃げない為に」

「逃げよつとしたらどうすの?」

「勿論ぶん殴つて怒鳴つて改心せせる」

翌日、スイッチをジョシュアに押させて呼びたてた男は相変わらず赤いローブ姿だつた。

現れた遊凧に初めにレノンが頼んだのは、剣核という人物の写真を見せてもらうことだつた。

「なんだ? 青宝絶音からなんか聞いたのか?」

そう遊凧は訝しげだつたが、ちょうど一年前に校内で撮つたという写真を見せてくれた。

やはりポニー・テイルで赤いローブ(今着ているものとは細部が異なる)を着ている遊凧に無理矢理手を引かれる形で写真に納まつた男。

五十代あたりだろう。

神経質そうに眉を寄せ、茶の短い髪で額には青い幅広の帯を巻いている。

目は琥珀のような濃密な金。

着ているものは漆黒の衣、とても戦い向きの、このタソガレにいる戦士達が着用するものにも似た衣服でローブではない。

ありとありゆる面において遊凧とは正反対で、レノンはそれでも、ああこの人ならと思える何かを感じ取った。

「きっと、素敵なおじさんですね」

その言葉に、遊凧はどこか嬉しそうだった。

「ああ、俺の自慢の片腕だよ」

さて、修理は終わりましたと青宝絶音を渡した。

遊凧はしばらく刃を見て、輪郭がぶれないことを確認する。

「もう、大丈夫だと思います」

「そつか。何か俺が気をつけることとかは？」

レノンは、微笑。

「ないですね。あえて言つなら、お幸せに」とだけ

なんだそりや、と苦笑する遊凧と共にレノンも笑つた。

そういうことなんです、とだけ言つ。

そして、

「ああ、そうでした。青宝絶音から伝言を仰せつかりまして」
につ、と笑みの浮かぶ口元、遊凧の紫陽花色の瞳がこちらを捉える。

「『これから来るどんな破滅にも災厄にも僕は負けません。だから一緒に、皆でいいゲームをしましょ』と」

その言葉に遊凧は一瞬口に乗せるべき言葉を失い、そしてすぐに青宝絶音の方を見て言つた。

「当たり前だらう。皆、皆で世界を舞台に遊戯をしよう。他の何よりも、楽しいのを」

そして礼をいい、報酬を聞いた。

それに答えるレノンは、じゃあケーキをと。

また剣核さんに迷惑かけますけどね、と言えば遊凧は笑い、あいつは俺に迷惑をかけられるためにいるんだと言つた。

「今度ケーキ持つてくる時には、剣核も連れてくる。青宝絶音の半分を作った男を見たいだろ？」「ええ、楽しみですとレノンは返す。

そうして青宝絶音を取り、この家を後にしようと遊戯は訊いた。

「そうだ、なあ、レノン」

「はい？」

「青宝絶音にとつての世界はフュンデラムだったか？俺と青宝絶音にとつての欠けてはならない場所は」

その問いには考える必要もなく、だからレノンはただ答えを口にした。

「とつても素敵な学校ですね」

自らの宝、学校を褒められて真紅は、だろ？と血慢げに笑つた。その手の中、もう一つの宝である青宝絶音が

一瞬だけ、笑つように瞬いて見えた。

（僕とあなたと、歯の世界で）
(ずっとずっと楽しく)

『たそがねにわ黄昏庭』に存在する唯一の国、タソガレ。

そこに一人の青年がいます。

武器と話す青年が。

全ての世界において一人しか持たない異能の彼は

今日も全世界の人々の、問題を起こした武器と話します。

武器、カタルカタル

悩みを、鬱を、快樂を、闇を、己を、所有者を
幸いを

今日も明日も、お酒さんは絶えません。
だけれどこの物語は、ひとまずソードグッタマンドゥルーエン

。

武器ワラウワラウ（前書き）

2話目は『巡りの朱姫』と『凱旋の女神』、その所有者の話。女の子可愛いです。所有者と周りは自分の書いてる他の話の登場人物です。

武器ワラウワラウ

魔術軸第三分岐第六世界『黄昏庭』。

その世界は、たつた一つの大陸にたつた一つの国。

国民達は争いを好み、極めて平和に平和に暮らしていました。言つてしまえば、？心？がなかつたのです。

こう改善してみよう、とか今的方法ではここがいけないと思う心が。

だから自然科学は勿論、魔術軸にありながらも魔術もほとんど発展していません。

この国は『タソガレ』と呼ばれます。

『黄昏王国』でも、『黄昏国』でもなく『タソガレ』。

タソガレには四季が無く、雪は降らず、焼けるような灼熱の太陽もありません。

農業を続けていれば飢えることもないこの世界では、人間同士の戦は過去の話となり、戦と言えばいつのころから現れた魔物との戦を表すようになつていきました。

同時にこの国は、魔術軸のみならず他の軸にある異世界とも交流し、変わり者が異世界の文化・書籍や日用品を取り入れたりもしていました。

この国では異世界の存在は一般人にも知られていたのです。

魔術の発展していないと先に申し上げたこの世界で、数人の魔法使いが暮らしています。

異世界から見れば魔術などとは言えない、不格好で不完全な『それ』。

しかしそれは、異世界の誰も持つてはいない奇妙で特殊で目を引くものでもありました。

彼らの『それ』は学問として成立した魔術ではなく、彼らが普通

に生活する内に自然と発生したものでしたから、それも当然かもしれません。

Ladies and Gentlemen!

そろそろ始めるにしましょうか！

これから紡ぐは武器と青年と鍛冶師と世界の物語。

武器、ワラエワラエ

己を、未来へと、過去へと

そして何より大切な所有者を想い。

彼ら彼女らといつかの約束を見る為に。

同じ『世界』で明日を迎える為に！

今日お話しする物語の主人公は、二人同じ『主人様を持つ『巡りの朱姫』と『凱旋の女神』。

二人はここにお願い事を一つ。

あなたをだいすきでいて、いいですか？

巡り終わらぬ姫は深く一度息をつきました。

自分の基礎を与えた『断罪』と

自分の身体を作った『鍛冶師』と

自分を振るい戦った『千刃鶴』。

己の傍にいてくれた、大切な人を想いながら、息を深く深くつきました。

一人の青年が、その世界にはいた。

正確には、二人きりしかいなかつた。

「うーん……」

雲一つ無い青天の空の下、唸つてゐるのは一人横に並んだうち右に座つた、ぼんやりとした空色の髪と、濃い海の青色をした瞳の青年。

それを左の青年、漆黒の長髪に同じ色、切れ長の目を持つ青年が怪訝そうに見る。

「どうかしました?」

先程まで取りとめもない会話を交わしていた所、突然空色の方が何か考案出し冒頭へ至つたのだが、漆黒の方には彼が何を考えているのかが解らない。

漆黒の問いに、空色は彼の顔を見て。

「いや、今何時ぐらいかなーと思つて」

え?と漆黒は問い、数瞬中空を見つめて、あ、と声を上げた。

「ううううううめんなさい!つい時間を確認するのを忘れていて……今、朝の九時です……。それに……」

それに?と訊いた空色に、漆黒が返す。

「お客さん、来ちゃつてたみたいですよ……」

え、と空色は返し、数秒間の思考停止。はたと我に帰つて。

「……お待たせしちゃ悪いじゃないか!」免、帰るね僕!」

「あ、はい、『めんなさいマスター!』

いつてらつしゃい、という声を聞きながら、空色は目を閉じる。

「今日も……頑張つてください……」

それが、空色がこの世界で聞いた最後の言葉だった。

「…………」

一人の男が、その部屋でじうしたものかと思案に暮れていた。

バランス良く鍛えられた長躯、濁つた赤の短髪に、同じ色、怒つ

ているかのように見えるつり目。

漆黒のスーツ、紺のネクタイを身に着けており歳は四十後半から五十年半ば程と見える。

おかしな所といえば、寒くも無いのに濃緑の長いマフラーを首に巻きつけているところが珍らしくか。

「

彼の口から放たれた言語はこの世界のものではないが、苛立ちの感情がはつきりと読み取れる。

いらいらとした様子で彼は部屋を見回した。

この家、上司から教えられた『武器の病院』にやつてきたのは無論依頼があるから。

まだ時間が早いようなら暫くどこかで時間を潰そうと思つていたのだが、玄関は開いていて。

小奇麗に片付けられた、応接間然とした一角、その奥には「いやいや」と乱雑に様々なものが置かれている。

花瓶や置物、ぬいぐるみなど、本当に雑多なものが積まれていた。正面にあるドアの先には居住スペースがあるのだろう。

更に目を引くのは一面の壁に敷き詰められた重厚な本棚と、それを埋め尽す分厚い本。

右を見ても左を見ても、本ばかりだ。

その光景に男は僅かに眉をひそめ、左を向いて視線を止めた。

まないたやティーポットなどがのつた机やシンクがある。客に向か出すための一角だらう。

そうしておいて、もう一度田の前へと視線を放る。

一対のソファー、左側に座った青年。

空色の肩までの髪、眠っているように閉じられている田だから田の色は解らない。

角縁の眼鏡をかけた、線の細い青年だ。

両の腕を絡める長い長い漆黒は刀だった。

なんの飾りも無い無地漆黒の鞘に収まつた、長刀。

まるで刀が使えそうには見えない体格をしている青年が刀を抱いて眠つてゐる光景に、男はどうしたものかと思つてゐたのだ。

先ほど肩に手をかけ、揺らして見たが起きようとしてない。

あまりに静かなので死んでいるんじゃないかと脈を計つてもみたが、どうやら生きてはいるようだつた。

これからどうしていいか解らず男がただただ途方にくれてゐると、唐突に背筋に緊がはしつた。

人の気配。

男が職業柄身構え降り返つた時、玄関が開け放たれると共に声が来た。

「いよいよレノン！ 起きて…あれ？」

男よりやや背の低い彼は、田の前に立つていた見知らぬ男に田をぱちくりとさせる。

男よりも鮮やか、燃える焰のような赤を宿す髪と田。

ややほつれの見られるベージュの作業着を肩までまくつていて、はいているのは登山用のブーツの様に見えた。

「ああごめん、お客さんか。さてはレノン、また宗久むねひさと話し込んでたのか…。どうぞ？ 入つて？」

彼の言葉を聞き、漸く男は翻訳が必要という想いに至つたのか右手を顔の前に翳した。

僅かな光がはしり、収まると口を開いた。

「すまん、もう一度言つてくれるか？ 今度は解る」

「ああ、翻訳の魔術でも使つたのか？」と彼は頷いた。

「たいした事言つてないんだけどね。どうぞ入つてください。俺は鍛冶師のジョシュア＝エビルソン。そこでちょっと『お話』してゐる武器のお医者さん、レノン＝コールの友達だよ。レノンだらう？ あんたのここまで來た目的は？」

ジョシュアに導かれ、レノンと反対側のソファーに座つた男はあ

あと返す。

「上司に聞いてな、武器の不調を治す医者があるって。俺は鶴恩渡、魔術軸第一分岐第一世界から来た、魔道界の警察官や」
その言葉に、はい？と、紅茶を入れていたジョシュアは振り返る。表情は驚きだ。

「嘘だーー！警察の人？正義の味方？」

渡は眉をひそめ、溜息。

「よう言われるわ。寧ろその敵側に見えるて」

「だつて、失礼だけど悪人面だもんなあ…」

人間見かけによらないものだと思いながらジョシュアが、淹れた紅茶を自分、渡、レノンと三つのカップに分けてそれぞれに配る。渡は礼を言つて受け取つたそれを一口含むと、ジョシュアに向かつて問うた。

「それで、レノンは今一体何をしとる？」

「ああ、えつと…あれがレノンの『治療』なんだよ。ああやつて武器に触れて目を閉じて、どうやってんのか良く分かんねえけど…意識の集中でもするとか、自分と武器しかいない『武器の世界』へ飛び込んだ。『武器の世界』つてのは、大抵が所有者の印象深い、あるいは普段暮らしている世界によく似てるけど武器の魂以外に生物のいない世界らしい。でも俺も行った事ないからなあ。で、その世界で武器の魂と話して、武器の悩みを解決してやることで大抵の不調は治つちゃうらし」

ジョシュアに聞かされた話がよっぽど珍しかったか、渡は暫く黙り何かを考え込んでいた。

先にジョシュアが問う。

「で、その問題がある武器は？先に見せてもらつてもいいか？俺武器大好きでさ、異世界の武器とか凄く興味あるんだ」

渡はジョシュアが先ほど、鍛冶師だと告げたことを思い出して、下手なことはしないだろ？と判断。

「ああ、それはええけど」

渡は右手を横へとさし伸ばし、少し意識を集中。それだけで亜空間が解放され、収められていた物が姿を表した。

すしりとくる重さを両手を使って支え、それを机に置いた。

見事な桐の箱と、紅蓮の布に包まれた細長いシルエットの一いつ。

渡は一いつの内、紅蓮の包みを取ると結ばれた紐を解いた。

途端にこぼれ出てきたのは、見事な軍刀^{サーベル}。

峰部分が真紅の色をし、刃と鍔が銅色で、指と手の甲をカバーするように弧を描いた半月状の柄が黒。

良く手入れの行き届いた、美しい刀だった。ただ、

「真つ二つ……」

刀が、縦に真つ二つに割れているのだ。刃側と峰側、常識的にはありえない方向に。

「これが、異常？」

「ああ、いくら腕のええ刀鍛冶に直させても一度とマトモに使わんうちにこれや。いうても割れ方はランダムで、刃が木つ端微塵の時もあるし、柄だけ折れる時もあるけどなあ」

ジョシュアはその言葉を聞きながら、まじまじと刀を見ていた。

刃自体は綺麗なもので、砥いだばかりの新品にしか見えず刃こぼれ一つ見受けられない。

割れた切り口も真に綺麗で、無理矢理の切断といった様子は全く無かった。

と、そこで

「んあ……」

頭を一度ほど搔いて、この部屋の主が覚醒。

渡とジョシュアとは一人とも彼を見た。

ぼんやりとした深い青の瞳が開く。

と、客としてやつてきている渡にも一言も何も言わぬまま、彼の表情はがらりと緊一色へと転換。

息を呑むような表情で、割れた刀へと手を伸ばした。

「……」「めんなさい、説明も何もしている暇がない、すぐに行き

ます。『めんジョシュア、お客様に説明とかよろしく頼むよ』
早口、一気にそれだけ言い切ると彼は皿を再び閉じ、囁く。
それは呼びかけの言葉だつた。

「君の世界を、僕に見せて下さい」

くん、と重力に従つた僅かな身体の動きと共に、彼は再び眠り始めたように見えた。

その手を、赤い峰と白い刃とに分かたれている刀の上に置いたままで。

渡は今見た現象と、己の世界で行われるある魔術の術式が非常に似ている為おぼろげながら彼の行為を理解できた。

渡は学問としての魔術は苦手、持つのは戦闘手段としての魔術力のみ。

酷い言い方をすれば頭が悪い。

頭脳派の上司ならもっとと良く理解できるのだらうと思ひながら呟いた。

「武器の持つてる”精神”と、自分の持つてる”精神”との共鳴か？いや…『武器の世界』に行くつて言つたな。自分を武器に潜り込ませる？」

「さあ？」

よくレノンを知り、何度もこの『治療』を見ている友ジョシュア

は大げさに肩を竦め笑う。

いつも通り、彼の特徴、誰に対しても等しく放たれるざわづくばらんな口調で。

「やつたことないし出来ないからわからんね。レノンにしか、いや、レノンにも多分何してんのか分かつてないだろ」

そうだ、と彼は立ち上がって、また台所となつたスペースへ足を運ぶ。

「甘い物は大丈夫？なんかお菓子でも用意しようかと思つけど。なんと言つても…」

振り返つた手には一つのチョコレートケーキが乗つた皿があり、

なんとも言えない笑みも浮かんでいる。

「ちょっと長い二人のお話し合いになりそうだし。その間に色々聞かせてもらひつけ？」

ソファーに座っていたのだから無論座った姿勢…膝を曲げた格好だった己の身が、何時の間にか直立し地を踏んでいることに気が付いたレノンは、はっと目を開く。

周囲に広がるのは紛れもなく武器の世界だ。

それがすぐわかるほど、周囲の世界は変質していた。

「やつぱり……！」

まるで、一枚のジグソーパズルが四方の端から崩れ落ちて行くようだ。

ひらり、ひらりと風に舞う世界の欠片。

風はレノンの髪をなぶる強さだが、不思議とその世界の欠片が身体のどこかしこに当たり痛いということがない。

静かな夜の世界。

きっと元の世界…あの赤い髪の所有者と共に暮らし、戦っていた世界の何処かの夜と同じ姿で、ただ生物がいないだけの世界なのだろうとレノンは思う。

飛び散っていく正方形、三角、多角形、様々な世界の欠片達。皆、輝く月、静かに煌く星、闇の黒が描かれているのが見てとれる。

中には暗い影の中にある杉の木や、何かの建物の一部だろう、硬質の灰色も見えた。

急いで前後左右を確認すると、視界に入る範囲にはまだ壊れて行く場所は見えない。

一瞬の安堵と思考、レノンはとりあえず前へ走り出す。

武器の持つ世界は所有者の世界に影響され、大抵が所有者にとつ

て重要な場所が基調となる。

彼の前にあつたのは、大きな大きな、白と赤の色味を持つ城だつた。

「お城…まだ依頼人の名前も聞いていないけれど、きっとあそこだと思う…！」

頼む、間に合つてくれと念じながら身体を酷使。どうかこの世界が崩壊する前に、と。

ジヨシュアの手から渡に渡つたのはチョコレートケーキともう一つ…一枚の紙だつた。

丁寧な字で書かれた記入欄には、氏名、年齢、職種などという言葉が見え、渡は一緒に渡された万年筆で記入していく。

なんでも最近始めた方法らしく、治療に有用そうな情報を纏める為に依頼者自身に必要な情報を書いてもらつそうなのだ。

もぐもぐ、と顔に似合わずとてもおいしそうにチョコレートケーキを頬張るジヨシュアは渡の書いていく情報を眺めている。

並んでいくのは荒つぽそうな外見にやや反し、角張つてはいるが整つた読み易い字で。

「『武器の形態・軍刀』『銘・在来業炎改』『名称・輪風朱姫』…つてどういうことだ？基礎魔力つて訳の分かんないことも書いてあるし」

ジヨシュアの疑問に、渡は、あ？と恐らく素なのだろうが空恐ろしいような低い声で万年筆を止めた。

「銘いうんはどの鍛治師に打たれたもんかを示す名、名称は個人が武器につけた名や」

かち、と万年筆で一度机を軽く打つ。

「俺達の世界では、作られる武器の殆どは魔道武器でな。魔道武器いうもんは…『外殻』になる武器としての形と、『内側の要素』に

なる基礎魔力で作られる」

ジヨシュアは暫く脳内で言葉を整理して。

「つまり、俺達の世界にある…」の宗久のよつなただの武器に、魔力つての付け加えると考えたらいいのか？」

と言ひと少し渡は黙つて。

「いや、付け加えるいうか…武器を人間と考えた時、ただの武器を体とすると今お前の言うたんは服を着たり防具をつけるということや。そうやない。その体の奥、遺伝子に魔術の力を組み込むと考えた方が近いか。遺伝子の中に俺のよつな使用者の魔力を受け入れ、魔術を使い易うする情報を書き込む」

一度言葉を切つて続けた。

「その仕事をするんが鍛治師や。代々鍛冶を受け継ぐ家があつて、この輪風朱姫の銘にある在来は東国の大鍛冶一族の名。それで、その組み込まれる魔力が基礎魔力。これは別に鍛治師の魔力を使う訳やなくて、普通使用者に武器を作つてやろうと思う依頼人か使用者自身の魔力を鍛治師が預かつておいて数週間かけてゆっくり武器の隅々にまで渡らせていく。鍛治師自身はその過程で自分の魔力を使うて、依頼人や使用者の魔力を武器に組み込んでいく」

「あーっと、分かつた。OK。でも話聞いてるとさ、そうやつて作られる武器なら愛着も湧くんだろ？その輪風朱姫はどうやって出来たんだ？誰かに貰つたのか？」

渡は沈黙、記入シートに視線を落として。

これから書こうと思つたのに先に話すことになるのか、一度手間だと思いまあいかと語ることにする。元来彼はそれが伝わるかどうかは別として己を伝えることを厭わない性格だ。

指差されるのは記入シート、一つの名。

「ここに書いたように、基礎魔力を与え、俺にこの武器を寄越した男は白虎切言びやっこせつごんという名や。もう何十年も前、俺が魔術校の高等部を卒業して警察…魔道警察に入った時に渡された。切言は俺より十一上で随分歳は離れとるけど、同じ先生を尊敬して学んでた。そのこ

とについては話すと長うなる。ともかく、白虎切言いう男が輪風朱姫の片親や。切言は俺に長う使える刀をと思つて東国の大門・在来の十七代目、在来官助ざいらいかんすけいう堅物ジジイに己の魔力を渡して、『全てを注ぎ込んだ最高の一刃を』と依頼した。それで出来たんが当時の在来が最高とした一刀、在来業炎の改良型・在来業炎改。武器には女神の加護をて女性名をつける魔道警察の慣例に従つて、切言が輪風朱姫と名を付け俺に渡した。名前が長いんで普段は輪風としか呼ばんけどな』

それからずつとずつとの付き合いで、ほんの数日前までは実戦で使つていたのだ。

全くなんで突然こんな不調が起つたか、ともう何度も思つたことを渡は繰り返す。

「輪風朱姫は切言の魔力を基礎においてるから風の魔力を宿してゐる。切言は一応えらい魔道士や、その魔力を持つ刀の輪風は今までおかしなつたことは一度も無いし、折れたこともろくに無かつた。それが数日前からこれや」

「なるほどね…そりや驚いたろ」

「まあな、と返して渡は回想する。

驚いたなんて物ではなかつた。

魔道警察の仕事…異形セルと呼ばれる化け物の討伐にその日も赴いていたのだが、異形との乱闘中に突然輪風朱姫が砕けたのだ。ガラスの花瓶を落としたように、バラバラに砕け散つた。なんとかその時には魔術と他の武器とで乗り切つたが、それからずつと輪風朱姫は様子がおかしい。

何度鍛治師に直させても、すぐにどこかが壊れてしまう。

初めは異形に何らかの術をかけられただけだらうと思つており、知人の魔道士や上司… いずれも世界でトップクラスの魔道士達に調べてもらつたのだが誰の口から返る答えも『魔術的に見れば何の異常も無い』だつた。

完全に原因不明の事態で困つてゐると、上司が告げたのだ。

武器の医者がいるそなだが行つてみるかと。

人手が足りなさすぎる魔道警察にも関わらず、上司は行つてくるなら二、三日休みをとつてやつてもいいと言つて来たのだ。

それもこれも、自分がどれだけこの武器を大切にしてきたかを理解しているからだといつことが態度から読み取れた。

だからありがたくそうさせてもらい、世界を渡つてここにいる。ついでに輪風朱姫ほどではないが多少調子の悪い武器がいるのでそれも診てもらうつもりだ。

「あ、ところで全然関係無いんだけどな」

唐突にジョシュアが人差し指を立てた。

「あ？ なんや」

「なあ、ちょっと暑くないかそれ？ 取つたら？」

指差したのは渡の首にぐるぐると巻かれたマフラーで、渡は少し顔色を変えた。

「ああ、これは取らんほつがええんや。醜いもんを人に見せん為に付けてるもんやからな」

ジョシュアがその言葉の意味を測り兼ねていると、渡はやや困ったように笑い。

「仕事柄、恨みを買うんでなあ。今まで逮捕してきた魔道士の中の何人かに呪われとる。首にかかる分が気味の悪い痣を作つてると、それを抑えて生き長らえられるように上司の封印錠がかかつてるんを見えんようにしてるんや」

「……あー…なんか悪い。イタイとこついつちやつたみたいだ俺」
構わん、と渡は一度座る姿勢を直した。

「お前のその、かなり年配の俺にも口調を直さんとこか気に入つたわ」

あ、俺これが素なんだけなあ…となんだか微妙な気分を味わいながらジョシュアはちらりと友を見る。

輪風朱姫に手を乗せ彼女の世界に行つたまま、まだ帰つてこない。

「…じゃ、まだレノンは帰つてこないみたいだし今度はその『上司』

の話、聞かせてもらえないか？渡さん、あなたをここに案内した人なんだよな？」

「……ツ！」

眼前の光景に、レノンは息を詰めて駆け寄った。

赤の城の中はまだ外のように崩れ始めていない。

城の中にはクラスと学年を表示したプレートが幾つもかかり、『職員室』や『特別教室』というプレートもあった。

そう、赤い城は学校だったのだ。

夜なのに火が灯つておらず、視界はいいとは言い難い。

唯一明かりと言えるのは、未だ崩壊の侵蝕を受けていないのだろう、輝き続ける満月の光。

こんな危急の事態でなければゆっくり鑑賞したんだけどね、と思ひながらレノンは走っていた。

そして発見した。

学校の中を走り回り、自分以外にただ一人この世界にいるはずの『武器』を探したレノンは、漸くここで見つけたのだ。

まず踏み入れたのは大きな四角い机が一つ、椅子が十脚ほどある会議室のような部屋で、

奥に開いた扉。

中へ踏み入ると、がらんとした部屋にグランドピアノが一台置かれていた。

敷かれた赤い絨毯、幾何学の模様がうつすらと描かれたそれの上に『彼女』は身を投げ出し倒れ込んでいた。

美しい鋼色の長髪は、頭頂部から半ばにかけて赤い色を宿しており後ろで一つにくくられていて、肌は病的なほど白い。

纏っているのは髪の赤よりも朱色に近い赤の衣で、背側が見えているそれはゆつたりとしたワンピースの形。

腰の辺りに銀の、ベルト代わりの紐がついている。

足は素足のままで投げ出されていて、やはり色が白く傷一つ見当たらない。

レノンは彼女のすぐ横まで辿りつくと、彼女を抱き起^レす。
これで漸く見えた顔はよく出来た彫刻の像のように整つた顔立ちをしており、

……まるで箱入りのお姫様のようですね…

そんな事を考えながら、レノンは彼女の肩を揺すり声をかけた。
自分しかいられない世界で誰かが呼びかける。

それがどういうことか、彼女には解るだらうと思い。

「お願いします…起きてください…あなたの声を、聞きに来たんです…！」

果たして願いは聞き届けられた。

ゆっくり、ゆっくりと彼女の瞳が開く。

予想されたその瞳の色は、やはり炎のような朱と赤の交じり合つ、美しいものだつた。

その目は、ゆっくりとレノンの姿を捉え、ピントを合わせる。

「…………あ…………あなたた」

「僕はレノン＝コール。あなた達と会話できる異能者です。あなたの所有者の方が、あなたがおかしいと思つて僕の所へ連れて来てくれました。一目見て、あなたが余りもたないことが分つたからすぐにこちらへ來たので、その方のお名前も、あなたの名前も分からないのですけど」

そうレノンが告げれば彼女は無邪気な笑みを作つた。

レノンと同じか少し上、充分に大人に見える彼女が作るには子供っぽい笑顔で。

「ありがとう……私は、輪風朱姫、輪に、風、朱色の朱で朱、で、姫と書くの。りんふうと、呼んで。私の、所有者は……渡さん、鶴恩渡さん。『鶴の恩返し』、で鶴恩、渡は…さんずいに一度の度よ、なるほど、とレノンは自分も知つていて『漢字』、字面を考えて

頷く。

「素敵な名前です」

そう言えば、彼女は嬉しそうにありがとうございました。

「…………あなたと、……ながくお話したいけれど……時間が無いわ……」

「はい。分っています。だから」

彼女の手を取つた。

小さな手、細い指だ。

今から壊れて行く、小さな体だ。

「…………あなたが渡さんに伝えたいことを、僕に託して下さい。僕は、あなたの思いを渡さんに伝えることができる」

うん、うんと嬉しそうに彼女は頷いて。

「つ……」

一つ涙を零した。

「話すより、こうしたほうが、早いから
え？」

レノンが疑問の声をあげるが早いが、それは起こっていた。

緑色の光の、複雑な幾何学模様の描かれた円陣が一人の周囲に起動している。

これは?といふレノンの声に、彼女は一度レノンの手を強く握つて答える。

「…………私は、魔術の……武器だから……私の記憶を、大切な思い出を、あなたに見て欲しいの……」

今度は少し寂しげに、笑う彼女。

「私を作ってくれた……一人の人と……渡さんの……記憶を……」

刹那、レノンの視界は白に染まつた。

巡る力持つ朱姫は思い出す。

己を愛してくれた三人と、己の始まりを。

気付けばレノンは、また別の世界に立っていた。

「え……」

友のジョシュアの家にあるのと似た炉とハンマー、それに鋳型。鍛冶場だ。

眼前、二人の男と少年が一人いた。

彼等はレノンの上げた戸惑いの声に全く気付いていない様子で、氣難しそうな黒髪短髪、手拭を首にかけた老人に、全く奇妙な色：真っ白の髪の上に虹色のフィルムをかけたかのように輝く、獅子のようにくしゃくしゃとした髪の青年が身振り手振りを交え楽しそうに話している。

瞳はおかしな事に、左目は飴玉のような緑、右目は空の青色だった。

初老は直線的なフォルムを持つ布、彩度を落とした青い着物を纏つており、青年は豪華絢爛な、白の上に銀で様々な刺繡が施された美しい羽織を着ているのに、その下には極々安物と見える濃緑の着物という不思議な服装である。

「それで」

黙つて頷いたり首を振るだけだった老人が声を上げた。
低く、鍛冶場に響き渡る声だ。

「今日は渡の武器を取りに来たのではないのか馬鹿者」

そう言われて、青年は目をぱちくりさせて、ああーと手を打つた。
漸く気が付いたというように。

「そうだったそうだった！すっかり本来の目的を放置してたー」「見守るレノンは、あの人はなんだかジョシュアに似ているなあと思つ。

いわゆる愛すべきお馬鹿さんジャンルだ。

「ねえー」

唐突に声を出してみたレノンは、やはりと頷く。

自分の声はこの世界の誰にも聞こえなくて、自分はこの世界の観客でしかないのだと気が付いて。

では続けて見守ることにしようと思つ。

眼前では老人が青年に溜息をついて、背後から一つの箱を出した。穢れの無い細長い木の箱で、蓋に文字がかれている。

青年が少年を手招きで呼ぶ。

背は青年より高く、つり上がつた目をした赤髪と赤目の中年。軍服のような灰色の衣を纏つてゐる。

レノンは確かに、その少年に見覚えがあつて。

……渡さん、ですね

きつとそうだろう、と一人頷く。

老人が木箱の蓋を取つて、まずはその蓋の文字を指差した。

「在来が最高とされた軍刀、在来業炎。その後継刀として打つた、わしの持てる技術全てを注ぎ込み作り上げた至高の刀。銘を『在来業炎改』といつ」

躍るような力ある毛筆で書かれた文字は確かにその銘を書き、隣に鍛治師の名が記されている。

在来十七代目、在来官助と。

無骨な老人の手は箱の中へと入り、中のそれを取り出す。目を焼けつかせるような朱色の布に、青年がおおと声を上げる。そこにあつた机に一度置くと、布が取り払われてゆく。現れたのはとても美しいその姿で。

と、レノンは疑問を抱いた。

これは彼女の記憶のはずなのにどうしてこいつやつて彼女が見えるのかと。

あとで聞いてみる必要がありそうです、と思つ。

現れたその刀に、初めて少年が興味を示した。むつりとしていた表情を変えた。

「さあ、振つてみてくれ」

老人がその刀を差し出す。

刀には、鞘が無い。

「鞘など、これには要らない。魔道警察に入るのならば亞空間に武

器を封じることになるのだらうし、それに

老人の表情は、笑みだ。

自信に満ち溢れた笑みだ。

「わしと《断罪》の合作の刀だ、斬ろうといつ強い意思にしか手を貸さない」

少年は差し出されたその柄、くるんと半月状になつたそれを一度撫でて、老人の手に重ねるようにして取つた。

ひゅ、空氣を切る音と共に一度空を斬つた。

「……名前」

少年は、低く不機嫌そうな声で問う。

すると答えたのは青年。

彼は楽しそうに笑い、告げる。

「今、俺が考えてやつたよ。彼女の名は輪風朱姫。巡つて終わらな
い不斷の力の象徴であり、涙の野郎に通じる輪。風帝と称する俺の
操る力、決して穿たれぬ自由の風。朱色は彼女の冠する色、お前の
得意な焰の色。そして、野郎のパートナーつたらやつぱお姫様
だろう?」

老人が一度満足げに頷き、良い名ではないかと呟く。

少年はじつと刀を見て青年の方へ向いた。

表情は、ふつと緩められた、僅かではあるが確かな笑みで。

「ありがとう、切言」

ははつ、と声を上げて切言と呼ばれた青年は笑い。

「渡に感謝された! 明日は何が降るやら、怖い怖い」

肩を竦め茶化すように笑つて、その延長で少年に言った。

「頑張れな。俺と二人と、その上にも、遊戯にも負けない位に。お
前は、俺達の中で一番涙を支えられるんだから。《先生》のいない
世界で…涙の支えになつてやつてくれ」

どうか、と青年はやや自分より背の高い少年の肩に手を置いて。

「どうか渡の未来が、自分の手で作られるものであるように。どう
か輪風がその助けになるように。そして願つて、俺と富助のじい

さんとで輪風を作ったよ。渡の好きにすればいい。好きなものを、好きなように斬つて、好きなように護れ」

その時、唐突に世界の終わりがやってきた。

気が付けばレノンは元の通り、彼女を腕に抱き起した姿勢で周囲の陣も消え失せていて。

彼女の顔を見れば、ふふ、と笑っていた。

「……見て、くれたでしょ……？……あれから……私と渡さんは……もつ四十年近く、一緒に戦つたの……」

「はい。確かに、見せて頂きました。幸せな、記憶を」「ええ、幸せだった……」

はらり、流れた涙をぬぐう力は、もつ彼女には無い。

「幸せが……ずっと、続くとは思つていなかつたの……きっと、渡さんが先に逝つてしまふんだろう、って……よかつた……一人で、私は寂しい思いをしなくても……いいのね……」

「つ……でも、渡さんは寂しい思いをしますよ？」

「いいんですか？」と問うレノンに、彼女、輪風朱姫は頷く。
「渡さんを支えてくれる人、私と同じような武器……どちらも、沢山いるから……。私には……渡さんだけだつたけれど……」「うん、と頷いて。

「伝えて、下さい……渡さん」。涙をといつまでも仲良くお元気で……と……

涙、という名前は物覚えの悪いレノンにも聞き覚えがあった。

先ほど彼女の記憶の中で聞いた名だ。

渡が支えになつて欲しいと、切言という青年に望まれた名。忘れないように。

脳に刻みつけてレノンは頷く。

「それから……私はあなたの為に望まれ生まられてきて、あなたと戦つてきて、本当に幸せでした、と……」

「はい。必ず、お伝えします。それから

まだどうか目を閉じないで、とレノンは願い、聞いた。

「あなたは、体をどうして欲しいですか？何処かに埋めて欲しいですか？海に沈めますか？それとも……」

「そうね、と考える吐息を吐いて、それから彼女は口にする。

「体を、綺麗に直して、それから……武器として、価値の無い私だけれど、使えない武器だけれど……傍に、置いていて欲しい……私は……渡さんの傍にいたい……」

分かりました、とレノンが返して微笑むと、彼女も笑った。
笑顔の美しい彼女だが、その笑みはレノンがこの世界で見たうち一番美しいものだった。

それは、壊れ逝く儚さを内包するからなのだろう。

ごめんなさい、もう、いくわ

そう彼女が告げた世界を、崩壊が包み込む。

一気に世界のピースが乱れ飛び、激しい風に目を閉じるその一瞬。ただその一瞬で、確かにレノンが立った地平、確かに存在した彼女の世界は一瞬にして崩れ去り

「！」

かつ、と小さな音と共に、矢は大きく的を外した。

世界は魔術軸第一分岐第一世界『クインテット』、位置は南国シヤルドヴァイゼンに領地を持つ白虎家の庭。

矢を射つたのは『』の名手と名高い諸肌脱ぎの老人、左目は緑、右目は青で、短く切られた白髪にはオパールのように虹色を宿している。

「どうしたのだ親父殿？外すなんて……」

後ろから声をかけるのは息子だろう、額に飾り帯を巻いた、同じ色の髪に、左目が金、右目が青の男。

しかし矢を射つた男は彼に振り返らず、ただ呆然と空へと視線を逃がし、ふうと至極辛そうに目を細めた。

「そ、うか、輪風…お前、官助のじいさんのとこに行つたのか」

「」を手放すと、不思議そうにこちらを見る彼は放つておき、手を組み祈りを捧げた。

「…俺達のお姫様、どうか君の騎士を天より護つてやつてくれ。鶴が己で望んだ空から、決して落ちぬよ！」

「あ……」

「レノン！帰つてきたのか？」

顔を上げれば眼前、友人のジョシュアと依頼人、四十年の時を経て成長した少年、輪風朱姫の所有者がいた。

己が手を置いた鋼からはもはや応答がなくて、全てが終わっていた。

レノンは参つたな、と微笑んで。

「先ほどは失礼しました。鶴恩渡さんですよね？輪風朱姫、彼女にお聞きしました」

「……ああ」

それでと聞く渡は、もしかしたら何が起つたのか知つているのかも知れないとレノンは思う。

「彼女の精神は今、亡くなりました。僕に、彼女があなたへと渡つた時の記憶を見せてくれて、あなたへの言葉を託して。それを今、伝えます」

一度言葉を切る。

渡の赤い目がこちらを見ていた。

「涅さんといつまでも仲良く、お元氣でと。それから、この体を直していくまでも傍に置いて欲しいそうです。もう武器として役に立つことは出来ない体だけど、と」

それを聞いた渡は瞠目、そして、ふんと面白くなさそつに言つた。

「どいつも、こいつも……」

告げられる言葉は、優しい悪態だった。

「俺に優しすぎるわ、阿呆」

（　　ずっと、私はあなたを）
(想い続けています…)

凱旋の女神はずつとずつと想つていました。
ただ一人の主のことを。

凱旋の女神は神聖な力、護りと再生の力を与えられていました。
その加護の力は主の為に使われました。

女神は己が生まれた日から、主の鶴を愛していました。

鶴は皇帝陛下と鬼と、孔雀、獅子、断罪・制裁・鉄鎧の三人組、
悲哀雷、それに、真紅…

皆に囲まれて毎日を楽しそうに過ごしました。

皇帝陛下はこの世を去つて、それでも女神は皇帝陛下の願いを聞
き届け遂行し続けていました。

鶴を一人にしないように。

鶴が鬼の為にいられるように。

凱旋の女神は今も想い続けています。

月の輝く夜。

かつん、かつん、鋼を打つ音。続く音。

生み出すのはジョシュアで、ここは鍛冶師である彼の家の鍛冶場

だ。

彼が真剣な顔で手掛けるは、峰が赤く染まる軍刀…輪風朱姫。武器と話す友、レノン曰く既に精神が死んでしまった刀を、ジョシュアは直す。

もはや彼女の体が勝手に壊れることはないのだから。精神の死んでしまった武器は、著しく攻撃の威力や使い勝手が落ちてしまう。

所有者であり魔道士である渡が言うには、彼女の体と内部にある基礎魔力とが完全に乖離してしまっており、魔道武器としてまともに使うことは出来なくなってしまっているという。

最早戦場に立つ必要のない体を、ただ所有者の傍にいる為に、ジョシュアは打ち直してやる。

なるべく他の金属を足すことがないよに、彼女自身の鉄をつて。

何度も友に頼まれて武器の『死装束』を整えてやったことはあるが、何度もやつても気分のいいものではない。

…使われる姿じゃなくて、もう変わらない姿を作るんだもんなあ…
「もう一つの方は、助けられるといいな」

そう言って、あの友なら助けるだろうと彼女の手入れを続けた。一段落着けたら友の家へ行つて、色々渡に聞きたいこともある。そう、レノンは輪風朱姫との対話で消費した気力を回復するのに一晩を必要とするので、彼の家に渡が泊まることになったのだ。明日、レノンの午前中の予定…学校での授業が終わった後、渡が持ってきたもう一つの武器の治療を行う事になつてゐる。

ジョシュアは告げられた彼女の名前をなんと言つたか暫く考える。なんだかごちゃごちゃとした名だった。

「ええと…」

鉄を叩く手が止まつて、そうして思い付いた。

「ああ、そうだ。トライアンフ」

脳裏に描かれるその名はGodness of Triumph。

「冠する意を、

「《凱旋の女神》」

丁度その頃、レノンは一つの武器を撫でていた。扉の奥、掃除が面倒なので普段使つていらない部屋を片付け渡の泊まる部屋として、彼に先に風呂に入つてもらつていて。全長は二十センチないぐらの両刃の短剣だ。

白い柄と金の鍔を持ち、その鍔はまるで車輪のように四つの穴がくり抜かれている。

刃の根元に真紅の宝珠が嵌まり、最も特筆すべきは銀の鞘と刃として物を切り裂く部分より内側に共通して施された意匠だった。赤い色彩一色で描かれた、空を舞う一匹の鶴だ。

そうしてレノンは左手の中にある紙を見る。

渡が書いたこの武器の調査書だ。

『武器の形態・護刀、短剣』『銘・西国石塚白雲真改』『鍛冶師：西国石塚三代目・石塚旗章』『正式名称・Godness of Triumph 意を、凱旋の女神』『呼び名・トライアンフ、トリイ』。

武器の特徴として綴られた次の文章にはこつある。

『内側に込められた魔力を消費することで所有者の身を護り、負傷次にはその傷を癒す。基礎魔力は先生と慕つていた《皇帝陛下》法師篤実。補填魔力は完成当時は法師篤実のものだったが、完成から一年足らずで亡くなつた為、その補填魔力が尽きてからは現在の魔道警察のトップ、同時に共に法師篤実を先生と慕つていた盟友、《悲哀雷》一世聖のもの』

危険な任務に赴く時懐に入れていたり、付け加えるか否か迷つての末だらう、やや行が空いて、あつた。

『トリイは所有者である自分だけのものではなく、魔道警察西国支部の皆に支持される女神である』

『人の子を護る、優しき女神様か…』

レノンはきつとまた素敵な人なんだろうね、と一人で頷いた。

彼女、トリイの体はそれはそれは美しい。よく手入れがされているものもあるが、護り刀といふことで実戦では用いられず元から痛む機会がないからといふこともあるだろう。

それでも、輪風を見た時にも感じた事だがよくよく手をかけられて大切にされているのが伝わってくる気がした。

それは渡が己の武器をただの武器、道具としては考えていないと

いうことで。

「もしかしたら僕と渡さんは似ているのかもしませんね」

そう呟いて、レノンはソファーの背もたれに身を預けた。

今日、輪風の世界で経験した彼女の死は普通に話をするのよりずっと堪えた。

「……」

なんやこの「デジャヴ」は、と風呂から上がった渡は思つた。

レノンがソファーに座つたまま寝こけている。

デジャヴとは言つても、あの時とは違いレノンは武器と話してはおらず普通に寝ていいようだが。

とりあえず顔に似合わずなんだかんだで優しい性質を持つ渡だ、放つておくわけにもいかず周囲を見て毛布を発見。

適当に広げてかけてやつた。

すると

「あ…すいません」

「…なんや、起きたか」

レノンは慌ててかぶりを振り、渡をその目に映して眼鏡を上げて眠たい目を擦つた。

「つい寝ちゃつてたみたいですね…じゃあ、僕もお風呂に入りましょ

うかね」

風呂上りの渡は白いワイシャツ姿で、首元を覆つていたマフラーは無かつたが一番上のボタンまできつちりと留められていて。

ふと目をとめたレノンは、そこに異質を見る。

白いシャツを透けて猶も届く異質の色。

焼け爛れたようなどす黒い皮膚が、首元、蛇が巻きついたが如くの歪な螺旋状に走っているのが分かる。

レノンの視線に気が付いた渡が、はっとして咄嗟に右腕を上げ首元を覆う。

「悪い、マフラーでも巻ことくべきやつた

「え、いや、あの僕こそごめんなさい」

レノンもジョシュアから聞いていた。

彼の首に刻まれているのは、警察官の彼を恨む魔道士達がかけた死と苦しみの呪い。

それを上司が封印錠なるもので押さえ込んでいるから、彼はまだ生きていられるのだと。

そのことを思つて、レノンは言つ。

「あの、明日はトリイの治療の前に、まずお話を聞かせてください。何か役に立つこともあるでしょ？」

何のだ、といった疑問を表情に出した渡に対し言葉を足す。

「ここに書かれた二人の人物、それに、渡さんをここへ案内した上司の方のことも」

それを聞いた渡は確かに、ああ、と頷いた。

翌日はからりと晴れた。

この町の学校で先生をしているレノンは朝早く起きて授業の準備をし、渡と、昨日の晩やつてきて結局泊まつていった友ジョシュアと共に朝食を摂り学校へ出かけた。

今日は昼で学校が終わりなので、昼に帰つてきたら三人昼食を食べて凱旋の女神の治療に取り掛かることにした。

その話をした後ジョシュアは本業、町の鍛冶屋として父を手伝つ

為に鍛冶場へと帰り、渡はと言えばあてがわれた部屋で眠っていた。
普段年中無休で働いているので、寝られる時に寝ておこつとの判断からだ。

すると突然彼の耳の中でその音は響いた。

笛を強く鳴らしたような、高い音。

それに渡は顔をしかめると、がばと起き上がり懐からシンプルな、
ペンのよしのなサイズの黒い筒を取り出す。

これは魔道警察で使用されている型の、渡の世界での連絡機器である。

ホログラム表示も可能な代物だが、現在設定は音のみにしている。

耳の中の音が途切れると同時に、その音は男の声に変わる。

『連絡もよこさんでええ度胸やなおい』

「ああ、そり悪かったな。で、なんや用件は」

相手は渡の一つ年上の上司……渡をここへ案内した上司だった。

『それがですね長官…』

唐突に割り込んできた声があった。それは渡の部下の青年の声で。
『鶴恩長官がいないと、叔部長がどうも調子出ないんですよ。俺達

じゃあご飯食べてくれませんし…』

『始終イライラして近づきづらいですし…』

『ちょ、やかましいわお前等！黙つとけ…！』

上司の低い怒鳴り声、部下達がひいと声を上げて黙つた。

暫く沈黙していた渡は多少怒りを覚えながら。

「……お前……昨日の晩何食べた」

答える声は当然、といつよう。

『チョコレートケーキ』

「他には」

『以上』

渡は頭を抱えるよしにして溜息。

この上司は中学生時代からの付き合いで、その頃から食は細かつたがその頃はまだ普通の食生活だった。

それが世界でも一、一を争う劣悪な労働環境の職場、魔道警察に属してからは体調が常に微妙に悪い状態で（まあ原因はそれだけではないが）、食欲がほぼ無くなっている。

普段は自分がなんとかして食わせているのだがその自分がいなくなるとすぐこれである。

基本が優等生で他に困った行動をしない彼だから、余計それが異常として目立つ。

「…今日帰る。俺が帰るまでになんか食うとけ」

その言葉に、相手があからさまに舌打ちするのが分かつた。

「それで、なんや用件は」

『切言さんが言つてた。…輪風が『死んだ』つて、本当か?』

一瞬渡は驚くが、切言が輪風朱姫に魔力を与えた人間だから分かつたのか、と思う。

そういうこともあるのかもしれない。

「ああ。レノン…武器の医者が言つこはそつらしい。割れてたんはこっちの鍛冶師に直して貰うたけど…基礎魔力と金属が乖離してゐる。もうマトモに武器としては使えんな」

そうか、と一言相手は返す。

『分かつた。後トリイ直したら早う帰つて來い。頭悪いのでも、おらんと手が足りんからな』

何か返す間も無く通話は切れて、渡は暫く何故彼が大した用でも無いのに通信を送つてきたかと考えてすぐにそれを放棄。

自分より頭のいい彼の考えなど分かるはずが無いと、もう一度眠りに落ちた。

輪風を亡くして、いい気持ちはしていないだろう彼を元気づけよう（？）としてかけてきた上司の気も知らないで。

ジヨシュアを連れて帰ってきたレノンはすぐにチャーハンとスープを作つて一人に振る舞つた。

その昼食を終えると、ブラックコーヒーを淹れた。

渡は何も淹れずに飲んだが、一人は「一人ともぼちやんぼちやんぼちやん」と沢山の角砂糖を落として、ミルクもたっぷりと。

…それだけ甘うするんはコーヒーへの冒瀆や…

渡はそう思ったが口には出さなかつた。

「それで…」

ティースプーンでかき混ぜ、角砂糖を溶かしながらレノンが言った。

眼鏡が湯気で曇り、どうもやりにくそうである。

「お話を聞かせてもらつてもいいですか。治療へ入る前に。武器の世界は所有者にとって大切な場所が投影されます。恐らく、トライの持つ世界も渡さんにとって大切な場所。なら、先にお話を聞かせてもらつた方が世界で彼女を見つけやすいんです」

渡は一度頷いて、コーヒーのマグカップを一度置いた。

「レノン、お前に聞いた輪風の世界…赤い城は俺と、これから話す奴等とが一緒に過ごした『皇帝陛下』の学校や。西国の魔術校グラルデーン。ソーサラー、魔剣士を育てる騎士の校」

皇帝陛下?とジョシュアが首を傾げる。

「偉い人か?」

「そう呼ばれてた。王様のある世界で、その人柄から呼ばれ名が『皇帝陛下』やつたんや。グラルデーンの校長先生、数多くの魔道士を育てた大先生や」

一息をついて、どう話したものかと思考。

そして考えるのが面倒だと思い、右手に意識を集中。

周囲に現れたのは蒼の光を放つ陣。

「レノンが、輪風の世界で遭つたのと同じ、記憶の再現や。術名は回想…俺の世界の見え方で、俺とは違つた視点を持ち俺の記憶を見る。これで見せたるわ。白虎切言、一世聖、法師篤実、それから光がより強くなる。

「鬼島浬、俺の上司との記憶を」

一緒にいつて来い、というわけの分からぬ言葉と共に、一人の

視界は同時にブラックアウト。

レノンが気が付いた時には、そこはある部屋だった。
見覚えがある。

輪風朱姫の世界、彼女が倒れていたピアノの部屋の一つ手前、会議室のような部屋だ。

明るい日差しの中の会議室らしいその部屋に一人は立っていた。
そう、隣にジョシュアがいる。

「うおおおお！？何、なんだこれ？」

「あー、うん。僕は一度輪風に見せられたよ」

慌てまくつて自分をがくがく揺すつてくる友に、レノンは言つ。「この世界では僕達…この記憶から言つ『部外者』達の声はこの記憶の人々に聞こえないし、姿も見えないんだ。僕達は記憶の観客でしかない。渡さんが見せたい記憶が終われば、元の場所へ戻れるよ」レノンの説明を聞いて落ちついたのか、そうかとジョシュアは頷いた。

すると聞こえてくる音がある。

ピアノだ。

滑らかに流れるピアノの音。

行つてみようとレノンが声をかけて、二人で奥の部屋へと向かう。扉を開けばグランドピアノを弾く初老の男がいた。

腰まで届く長髪は氷のような薄青、笑んでいるような優しい瞳は

濃青。

腰に剣を帯びれば完全な騎士の姿となるだろう、赤のマントを纏つた姿。

城の内装、マントを含む衣服と周囲の全てが赤系統の世界で、青い彼の頭だけが異質に思われた。

なだらかに、頭を撫でられているような優しい音が耳を刺激して

いく。

「……ジョシュア、この人が」

「ああ。多分、この人が『皇帝陛下』だ」

「そう思われるを得ないような、大きな力を一人は無条件に感じていた。

「でもや、どうしてこれが俺達に見える?」

ジョシュアがレノンに問う。

「『違った視点で、俺の記憶を見る』って渡さんは言つたよな?でも違つた視点でもなんでもさ、渡さんがいなきや『記憶』じゃないだろ?」

ああ、そのことレノンは笑う。

「よく気付けたね?」

「あれ?俺馬鹿にされてる?」

さあね、とレノンは楽しげに。

「僕も…輪風の世界でも思つたんだよ。でも何故こいつなのかは分からない。渡さんに聞いてみないとね」

と、ピアノを弾く彼に近づく者がいた。ジョシュアとレノンとが通つてきたそのドアから入り、その男の傍に来て、肩を叩く。ふわりと輝く金の短髪と、同じ色の瞳を持った青年。手を止め、彼を振りかえつた初老は笑う。

「今日は君が一番だよ、聖」

「よかつた、急いで来たんですよ。おはよござります法師先生」

「おはよう」

交わされた名に、レノンとジョシュアは顔を見合わせる。

「じゃ、やつぱピアノを弾いたのが法師篤実で」

「金髪が一世聖…魔道警察のトップってことは、僕等のこと階級が同じなら警視総監だね」

さて、じゃあお茶を淹れようかと椅子から立ち上がる篤実とそれに続く聖。

と、そこへ飛び込んできたのが三人いた。

「ちつ！…聖兄に負けたか！」

いかにも悔しそうに言つたのは茶の着物、茶の長髪を一本のみつあみにした聖より若そうな青年。

「急いだのになあ、残念だ」

残念と言ひながら何処か楽しそうに肩をすくめたのは白い髪に虹色を重ねた、白い着物の青年。

これはもうレノンは一度見ている姿で、彼は白虎切言だとジョシユアへと教えた。

「…おはようござります、法師先生」

前の一人の言葉を受けるようにして言つた声には、渡と同じイントネーションがあつた。

ダークレッドの混じる黒の長髪を下の方で一いつにくくつており、同じ色の憂いを帯びた瞳を持つ青年。体の線が前の二人よりも細い。

その三人を見て、篤実は笑つて。

「ああ、おはよう。少し残念だつたね、れんき煉喜、きりあけ切言、とうち桐明。おうちの仕事は大丈夫かい？」

そう聞かれ、一番細い彼が答える。

「大丈夫です。出てもいいか聞いてきましたから」

そう、と篤実は笑つて、彼らを伴い会議室然としたその部屋へ。座つているように指示すると、自分は出ていった。

茶を淹れに行つたのかもしれない。

彼らの歓談を聞くうちに、二人はみつあみが煉喜、細いのが桐明、白髪が無論切言と理解した。

やや間があつて次に現れたのは黒の短髪に紫暗の瞳を持つ筋肉隆々の男と、緑の短髪と瞳の女性。

彼女は女性にしては背が高く、髪の切り方もとりあえず短ければいいといつたボーアッシュなもんで。

「おう、どうやら俺達は遅れちまつたか」

「先生はお茶を淹れてくださつてゐるの？・ビジリ」

言いながら、上座を空けて聖の隣へと二人揃つて座る。

女性に聞かれた聖は柔軟な笑みで答える。

「そうだよ。随分久しぶりだけど……初樹は今、正規魔術教員を目指して修行中だっけ？」

ええ、と女性が頷く。

「色々な学校で色々な先生に学んでるの。今は北国。次で研修終わりにして、一度試験受けるつもりよ」

「初樹が先生ってなんか変な感じだなあ……で、薰はフリーでつらうろか。いいよなあ氣楽そうで」

そう言う煉喜に、黒い短髪の男、薰は肩を竦め。

「そもそもねえんだなこれが。結構苦労も多くてよ」

苦笑と共に告げた言葉の頃、突然階下から怒号が聞こえた。

「遊風ーー死ねこんのド阿呆がーー！」

「え」

「遊風って……」

あの遊風さんだよな、と聞いてくるジヨンシュアにレノンは多分、と頷く。

前に青宝絶音せいほうぜついんといつ名の曲刀を見て欲しいと連れてきた老人の名である。

彼は水色でメタリックパープルの混じる長髪をボーネールに結い上げ、目は紫陽花色。衣服は赤のローブという姿だったが……。

しかしその怒号のことを考えている内に、一人の背後で戸が開く。ピアノの部屋へ通じる部屋から、目を擦り擦り一人少年が出てきた。

た。

この校の制服なのか、赤いマントのような姿をした衣服。濁る赤の短髪と、同じ色のつり目。

「渡さんだ」

レノンが言った。漸く彼の記憶であるはずのこの世界に彼が現れたのだ。

煉喜が声を立て、みつあみを揺らして笑う。

「一体どこいたんだ。お前眠そうじゃんか」

「…朝から奥で寝てたんや」

「くく、と薰も笑う。

「午前中授業あつたんだろう? またサボりかお前。魔術剣の授業しか出てねえつて涙に聞いたぞ?」

「勉強は嫌いや。武器を握つてるだけがええ」

きつぱりと告げたその口調。

あらあら、と初樹が苦笑して。

「なーんにも言わないなんて、先生も何だかんだでちょっとばかし、

ワタルに甘いわよね」

渡はその言葉に何も反応せず随分と年上の仲間達を見て、疑問の表情を作った。

「……涙はどうした? さつき魔力感じたけど」

「まあ待て。すぐに来るわ」

ふ、と桐明が無表情だった表情を崩して花が開くような美しい笑みを作る。

三人組の中央に座つている彼に、両側から残り一人が同意。渡が、訳が分からぬといつたように首を傾げた時、ばん! と戸が、廊下から通じている戸が開いた。

大きな音に、レノンとジョシュアも視線をそちらへと放る。現れたのは、

「やつぱり遊戯さんだ…」

二人が会つた時よりもずっと若い、二十代のころの彼だった。

悪戯っぽく光る瞳が印象的な青年。

彼、静桐遊戯が真紅の魔道ローブを翻して会議室へ飛び込むとすぐにつつてきた姿があった。

やはりこの学校の生徒なのか、渡と同じ衣装を着た少年。

青が濁つた色のややつり目、それと同じ色の濁る青の短髪。但し、今は白い粉をかぶっている。

「ぶつ! おま、それどうしたよ?」

それに噴き出した薰。心外だ、とばかりに少年は言つ。

「遊凪のド阿呆が、俺の部屋の入り口に黒板消し挟んだったんや！ それ避けたら…」

「ふふふ、一発目は避けられると思って足元に一発目の起爆剤、糸張つといったんだよ！ うまーくプチンと切ってくれてな！ おかげで涙の頭にクリティカル ヒットだ。凄えだらつー！」

「黙れ死ね！！」

むきになつて怒る少年に、ちょっと悪い大人の仲間達は大笑い。それがまた恥ずかしいやらなんやらで、神経質そうな表情だ、生真面目融通が利かないタイプなのだろう少年は彼らにも怒る。

「つー渡ー！ お前まで笑うな！」

見れば、渡もまた口元に手をやり、堪え切れないとこうよつに笑つていた。

「いや… 涩がそんな間抜けなことになつてんのが、珍しゅうてな」「だ・ま・れ！ 人事やと思うて…！」

「こらこら、そこまでにしなさい」

その時、廊下側から笑みを湛えた篤実が帰ってきて、青い髪の少年、涙は渡の胸倉を掴んでいた手を離す。

「先生！ 遊凪が…」

「うん、じゃあ話はお茶を飲みながら聞くよ。ほら、美味しそうだろう？」

彼が涙に示したお盆にはレモンティーが人数分と、一本のロールケーキ。

「素敵！ 先生が作ったの？」

そう聞く初樹に、篤実は頷いて。

「今日の為に、昨日の夜作つたんだ。涙と渡に手を貸してもらつてね」

柔軟な笑みを湛える篤実は、涙に盆を示していた左手をそのまま彼の頭の前へ持つていく。

するとぱちん、と小さな音がして水泡が弾けた。

その水泡は霧状に弾けて涙の髪を包み込み、それが失せると、綺

麗にチョークの白い粉は無くなっている。

その光景に、レノンとジョシュアとは揃つて釘付けになつた。初めて見る《完成された》魔術だ。

「ほら、綺麗になった。じゃあ《皇帝の子エンブリオら》の久しぶりのお茶会を始めようか、ねえ、涙？」

そう言われて、渋々といった様子で涙が頷く。

「……はい、先生」

かくして、篤実の手でレモンティーが配られ、篤実に指名されで《長兄》の聖がロールケーキを切り分ける。どちらも全員に行き渡ると、じゃあと篤実が言った。

「涙、遊凪のした事だけれど、どうしてだと思つ?」

「どうしてもこいつしても…！」

上座の篤実に問いかけられ、同じく上座に立つレノン、ジョシュアと向き合つ形だつた涙は机の向こう側、上座から聖、煉喜、桐明、切言と並び一番下座に座つている遊凪を睨んだ。

「遊凪は俺をおちょくつて楽しいだけです!」

「そうとは限らんぞ副会長殿?」

にやにや、そんな擬音付きで笑いながら声を上げたのは煉喜だ。

「お前、端から見てどれだけ力入つてるか分かってるか?俺達が生徒会長だった時以上だぞ」

「当主見習いの今も力入つてないやろ」

冷静に隣、桐明につつこまれ、まあな!と煉喜は認める。

「レンのいう事は後半無視な。あと力入れてなかつたのこいつだけだ。レンは高等部時代色惚け全開MAXでさすがの俺達も手に負えなかつた」

「ちょ、セツ!-酷さにも限度がある!あと高等部のことは春陽はるひが可愛すぎるのが罪作りだ」

は?と思考が停止した涙に続けるのは切言で、彼の言動を酷いといつのは煉喜。

煉喜は、春陽はあの時もうほんと可愛くてなあ、あ、今は美人だ。

などと素でのろけた挙句に桐明に後ろ頭をぶん殴られて黙らされた。「相変わらずあんた達三人、仲良しねえ…いいことだけ。ま、つまりそういうこと」

薰を挟んで、初樹が浬の顔を見て言った。

「まあねえ…超の付く問題児、渡と同室だから苦労も絶えないんだろうけど…あ、昨日も乱闘騒ぎだつたそうじやない?」

「悪かったな問題児で」

むつり、腕組みの姿勢で渡が返す。そのまま彼の手は浬を捉えて。

「邪魔やつたらいつでも出てくぞ」

「出てけなんて誰も言ひてへんわ阿呆。第一、好き好んでお前の世話する奴なんて俺の他におらんやん」

「あーあーこらこら止めろつて」

そう薰が言いながら浬の頭をホールド、自分の方へ引っ張つて渡から引き離す。

「なんで浬は、渡とはすぐ言い争いになんのかね」

「喧嘩するほど仲がいい、と言ひやつさ」

そう言つて笑む聖はロールケーキを口に入れて幸せそつ。

ははは、と皆を一望する篤実は声を立てて笑つて。

「分かつたろう、浬。ここにいる皆して、新しく生徒会の副会長になり心労が増えて、最近顔色も悪い気がする君を心配していたんだ。誰よりも遊風と…渡がね」

その言葉に浬は驚いて隣を見るが、渡は目線をふいと窓の外へ。ぽつりと言つた。

「…同室の人間に辛氣臭い顔されたらこっちの気が滅入るわ」

その様子に、本當によく似た一人なんだよなあ、と篤実は苦笑。一口レモンティーを含んで言つた。

「渡はその心配な気持ちを、浬に率直に言ひ方方法がわからなかつた。そういうのに慣れてないからね。それで私に教えてくれた。無論私も気付いてはいたけれど…」

「私達もそれを聞いて心配してたんだ。体を壊しはしないかって。涙は少し真面目過ぎるからね」

言葉を接いだのは聖で、彼も優雅な動作でレモンティーを口にしながら。

「ね？」と問いかけるのは目の前、初樹だ。

「ええ、そう。なんでもカイリ、高等部一年も首席修了だったそうじゃない？ ほぼ満点で。どーセまた根詰めてくそ真面目に勉強したんでしょう？」

「自称女の子が『ぐせ』とか言つんじゃねえよ！」

おいおい、といった口調で注意する薫に、悪かったわね、と言い返して続ける。

「あんまり『飯食べない』って話もワタルに聞いて、お姉ちゃんは力オルと電話でどうするか話し合つたりしたのよ？」

「おうよ。遊凧がやつてなきゃ俺が何かしてたかもなあ。」こう、なんかぱーっと笑えるのを」

先越されて残念だ、と言つて、だが嬉しそうに笑う薫はもうローラケーキを食べ終え銀のフォークを置く。

「ふむ。私個人としては得意の幻術でなんか笑わしたろと思つてたんやけど」

そう言つ桐明に、そうそうと切言が。

「一週間休学させて俺達の東の別荘で強制休暇つて案がそのあと有力になつたんだよなあ」

「素敵なタイトル付だつたよな！」

煉喜の言葉を聞いて遊凧が頬杖の姿勢、無邪気に問つ。「で？ そのタイトルつて？」

桐明が真顔で答える。

「『東国別荘シリーズパート4・春から夏へ…花見温泉湯煙殺人事件』」

「聞かなかつたらよかつた！」

「ひい！ と多少ビビリの聖が。

「それ完全トラウマ物だよー！癒す気皆無だよー！なんでシリーズ化してるので！？」

「うむ！」と煉喜が何故か誇らしげに。

「一週間の休学のはずが、永遠の休暇になるー永遠に俺達の別荘で癒し続けてやるぞー！エンドレス癒しだ！」

「この面子中唯一の女性、初樹は苦笑して。

「あーうん。あんたたち三人、脳の検査受けてきなさい。常人と九割構造が違つてると思うわ」

その時だった。

ふつ、と涙がふきだして、それはそのまま声を上げての笑いになる。

止まらず笑えて泣けてきたよつた。それがひとしきり続いた後漸く喋れるようになつた涙が言つた。

「皆、最高や。なんか、全部アホらしくうなるぐらい」

ありがとう、と彼の口から告げられた遊凪は、それはそれは嬉しそうに一つ笑顔で頷いた。

それをとても楽しそうに見ていた篤実が、涙にふと一つ聞いた。

「渡には、いいのかい？」

そうすれば涙は、にや、と笑つて隣の少年を見て答えを返す。

「ええんです。下手に礼言つたり褒めたりしたら…俺とコマイツの距離は逆に開く」

そう言つた涙の顔は実に晴々としていて、目を逸らしたままの渡の顔も心なしかいつもの仏頂面から柔らかく見えた。

「どうか、と篤実は笑つて。

「じゃあ今日は魔術談議は無しだ。後の時間は…」

少し溜めを置いた篤実に、皆の視線が集中。

なんだろう、と予想したのは一人同じだつたようで、レノンヒジヨシュアはそれぞれの考えを述べる。

「ゆっくりこのまま雑談じゃないかな？というか、魔術の談議とかしてたんだね、普段。結構堅いなあ」

そうレノンが言つと、いやいやジョシュアは腕を組んで。

「俺の個人的希望としては模擬戦がいいな！」

「超個人的希望来たね」

しかし篤実の口から来た答えは、どちらとも違つた。

予想もしなかつた答えで、でも彼らにとつては当然の答えだつた。
「歌おうか。涙の肩の力をもつと抜く作業だ。皆、協力してくれる
ね？」

皆が席を立つて向かうのは奥、ピアノの部屋。
レノンとジョシュアもついていく。

奏者の席につくのは篤実で、彼の周りを皆が囲むがそれは大体年
齢で固まつていた。

聖、初樹、薰の年長組、煉喜、桐明、切言の三人組、それに遊凪、
涙、渡の年下組だ。

一番歌うことを楽しそうにしているのは遊凪だつた。

「な、先生最初何からいくんだ？」

「ん？ うーん、そうだね… こうして皆と一緒に久しぶりだから、
まずは皆で歌える歌がいいね。せっかくここで歌う一曲目だから、
私の作った曲にしようか」

篤実の細い指…騎士然とした服装からして剣士なのだろうがそう
とは思えない綺麗な指が鍵盤に載り、なだらかに動く。

初めはでたらめに。

そして一つの旋律を紡ぎ始めた。

優しく流れる、起伏には乏しいが几帳面に編まれた織物のような
曲調。

そこから突然アップテンポに入つて、跳ねるような元気さを得て。
レノンとジョシュアとが見る皆は、それが何の曲だかすぐに分か
つたようだつた。

体でリズムがとらわれている。

音が消える一瞬の後、入つた。まずは全員の声量が来る。

男声が多く、女声もハスキーボイスの初樹のものだから、自然歌声は低く。

だがそれ故に重厚な響きを持つて部屋を鳴らした。

『もしも私が神様ならば』

次に来るのはソロ、テノールの聖のパートだ。

真摯な態度が基本姿勢の『皇帝の子ら』の長兄は無論高貴この上なく麗しい声で紡ぐ。

『世界は優しく 暖かい思いやり溢れていて』

ソロのパートは続く。初樹だ。

女声、アルトパートで歌う彼女は力を込めて、だが女性特有の華やかさを附加して歌う。

『戦争もなければ 餓えもせず』

続くは更にアップテンポ、明るいパート。

歌うは地を震わすバスのパート、薫だ。

彼は楽しそうに紫暗の瞳を煌かせ。

『誰も彼もが夢をもつて』

次はソロパートではない。三人組はやはり三人組。桐明がバリトン、煉喜がテノール、低音の切言がバスパートを担当する。

中等部時代に出会つてからといつもの、互いを魂の片割れといつて憚らない三人だ、息の合ひ方は言つまでも無い。

完璧なハーモニーが奏でられた。

『誰も彼もが楽しい そんな世界にするだろな』

次には真剣、力の籠る叫びのようなパート担当するのはバリトン

の遊凧。

彼は右の拳を握り、それが彼の本心の言葉であるように歌い上げる。

なんでも出来てしまつ天才と呼ばれる彼は、無論歌唱力も並以上であり。

『子供だって願える単純な願い』

叫びは続く。受け継がれた先是同じくテノール涙で。

彼は遊凧と対称的に胸に手を。理性的に。

『そんな全部を叶えたいのに』

ソロパートを締めくくるのは静かな、静かな呟きにも似たバス、渡のパートだった。

渡は静かに目を閉じて。

『どうしてだらう? どうして私は 強くなれないんだろう?』

後は全員一緒に、強く歌い上げる。

ただ終わりに向かつて、全員が気持ちよく互いに響き合ひ音の場だ。

その音に囲まれ弾く篤実が、一番気持ちよさそうな顔をしているようにも見える。

彼の声もまた歌を紡いだ。

『どこまでも どうしても 弱い身体が 軋む心が 求める

強くなりたいよ 明日笑えるよう

でもやっぱり 神様はいいか

君と出会えて思えた 君と同じ 哀れな人の子で
私はそれでいいや 君とでなきやあ、』

曲が終わり伴奏が途切れ。最高!と遊凧が嬉しそうに叫んだの

を終わりにして、レノンとジョシュアは世界の転換に巻き込まれた。

「…お？お？」

暫く先ほどの歌に一人は放心状態だったが、我に返ったジョシュアから疑問の声が上がる。

周囲の世界は変わっていた。

あのピアノの部屋ではない。

どうやら周囲の世界は赤い城の中ではないように思えた。

「それで」

後ろで響いた声に、一人で振りかえる。

涙と渡との姿があつた。

やや成長したようで、一人とも軍服に似た灰の服…レノンが輪風の世界で見たのと同じ服を纏っている。

「お前も来るんか、魔道警察に。それも俺と同じ本部勤務かい」

そう訊いたのは涙、答えるのは渡だった。

「元々俺が魔道警察へ行くんは決まってたことや。戦いしか能のないような奴やしな。お前が行つたんがおかしい。配属先はどこでもええって言うたら、聖に勝手に決められたんや。なんでも、自分の目に付く場所に置いときたらしくてな」

そうか、とだけ涙は返した。

また転換が起ころ。随分早い、とレノンは思った。

世界が変わった。

どこかの建物の中、夕焼けが照らしている。

今度は一人の前に、涙と渡とがいた。歳をとつて、壯年と呼ばれる頃合だ。

衣服は互いに濃灰のスーツで、涙は椅子に座り渡は立つていて二人の間に重厚な机と大量の書類がある。

他に変わった所と言えば、涙の短髪がオールバックになり、手には白い手袋、頬に傷があつた。

渡の首にマフラーが巻かれている。

「渡

「あ？ なんや、 わざわざ呼び出して」

涙は一時沈黙して、意を決したよう。

「西国支部を任せされることになった

「は？」

訳がわからない、といつよつに聞き返した渡に、涙は続ける。

「来月聖さんの警視総監就任が決まった。それで、右腕として使つてきた俺をどつかの支部長に据えることにしたんや。一度西国支部の落影支部長が今月一杯で隠居したいつて言つててな。それで、西国支部が空くんなら俺を西国支部長にしてことらし」

「……そうか

渡は一度頷く。

「で？ 俺は本部勤務のままか？」

やや寂しそうに見えるその表情に、涙は一度笑みを浮かべる。

「聖さんが言つてくれたんや。本部だけでなく、どこの支部からでも好きな奴連れて行けつて。俺の信用できる人間、俺が力を認めた人間を西国支部へつて」

射抜くような印象的な視線で、渡を見つめる。

「誰でも選んで連れていける、その権限を初めて行使する。来るか？ 俺と一緒に、正義と騎士の國へ。先生の教えてくれた正義を果たしに行く鬼に… 鶴はついて来るか？ 荒れ模様、辛い空を… 空を飛べん鬼の代わりに飛ぶ覚悟はあるか？」

「訊く意味があると思うて訊いとるんか

間髪入れずには返せば、立ちあがつた涙が渡の横を抜け、この部屋を後にする。

渡に背を向けたまま、言葉が飛んだ。

「鶴恩渡。お前が来月から西国支部の刑事長… 実働部のトップ、支

部長の右腕や

刹那、世界の転換が襲ってきた。おかげで、渡がどんな表情をしてどう答えたのかは一人には分からなかつた。

「見たか」

は、と気が付けばそこは元の部屋。

レノンの家のリビングだつたり応接間だつたり色々な部屋で、コーヒーを飲みながら渡がこちらを見ている。

見れば、自分のマグカップからはまだ湯気が立ち上つていて。

「はい…あの、歌…とても素敵でした」

素敵な仲間ですねと言えば渡はぱつが悪そつこ、記憶の中で見たのと同じように視線を逃がした。

「でも、なんで歌を？」

そのジョシュアの問にはすぐに答えが返る。

「俺達の世界、魔道士の世界では舞いと、それに歌を付加する文化があつてな。卒業・入学式とか昇進の祝いとか、とにかくめでたい席で舞われるんや。その舞いと歌とが上手い奴が重要な地位を得てた時代があつたらしい。今はもうそんな露骨でもないけどな…まあ下手より上手いほうがええやろ。それで先生が俺達にみつちり教えてたんと…先生の趣味が作曲やつたんで、先生の趣味つてのも関係するか。俺の取り得が戦闘技術と音楽しかなかつたんもある」
へえーとしきりに感嘆するジョシュアに渡は、止め止めと言つように左右に手を振り。

「トライに関係ありそなこととかの解説、いるか?記憶見ただけやつたらちよつと足りんやわ」

「お願ひします、あ…えつと」

なにやら言いたいことがありそなレノンに、渡は口を挟まないことで続きを促す。

「僕達が見たのは渡さんの記憶なんですね？何故初めの記憶で、渡さんは眠っていたのにその間の皆さんの記憶が見えたんです？」

ああ、その事かと一つ頷いた渡は軽く左腕を広げる。

一瞬のイメージでそれは来た。

魔力の可視化である。

「うわっ！？」

ジョシュアが思わず眼前の光景に声を。

透き通つた赤い何物かが、渡の身体を中心として発散、ジョシュアとレノンの身体を貫き部屋一つを埋め、それは壁を突き抜け外へと出でていで。

まるで焰のように揺らいでいる。

「俺の発散してた魔力をお前らにも見えるようにした。俺らの扱う魔力いうんは、要は生命力や。生きてるもんは動物でも植物でも持つてて、人間はそれをきまりに従つて定められた呪文で増幅させたり調整したりして術の形にする。慣れたら集中だけでも使えるけどな。病や術の使い過ぎで魔力を使いすぎたら、命にも関わる」

もう一度の集中で、赤い光は消え失せた。

「リメンバーストック『回想』は、正確には使用者の魔力が記憶してた物を他の奴に見せる術らしい。俺は頭が悪いんで詳しくはよう分からんけどな。さつき見せたように、魔力はなんもしてなくとも勝手に結構な範囲に広がる。他の奴に見せんようにする事は出来ても、全く出さん事は無理や。まあ、そういうわけやな。あの時俺は奥の部屋で寝てたけど、魔力の届く範囲内に先生や他の奴らがおつたからそれが記憶として残つた」

一度喋り疲れたか言葉を切つて。

「犯罪操作にもよう使われる術や。不便なんは自分の記憶に自分で入れんこと。俺も初めの記憶の中、俺が起きてきてないとこの記憶は勿論無い。涙に見てこさせて、それを聞いたから大体は知つとるけどな」

こんなところで分かつたか、と聞くとレノンは頷いた。

ジョシュアはまだ唸っていたが、レノンは相棒が難しい事を理解できないのはいつもの事なのでさっさと進める。

渡は次に記憶の中、トライに関わるかもしない話へ。

「それで…三人組の中の白髪の男が白虎切言、輪風の半身を作った男。水色の長髪、年寄りが法師篤実先生、金髪のふわふわしたのが一世聖。静桐遊風には会つたんやつたな」

「はい、とレノンが返す。

「そこからあの三回ともに出てきた、鬼島狸にレノンの話がいつてな。それを狸が俺に教えて、今俺はここにある」

遠くを見る眼で、続けた。

「調査書に書いたように、トライの基礎には篤実先生の魔力があつて中に魔力を注入してある。その魔力は先生が亡くなつてから暫くで尽きてな。その代わりに、俺達…記憶の中で見せた、先生を慕つた集団、『皇帝の子ら』の長兄、聖がトライに魔力を入れた。エンブリオつて名は確か記憶中で出てきたな」

どう続けたものかと思案、続ける。

「先生は正義を愛した人やつた。己が絶対に貫きたい思いを正義と定めた人やつた。俺達は自分の正義をもつて、その時から生き続けている。その正義が、俺には大切な人間の道を護る事や。俺は…最初の記憶で見たような調子や。狸と妙に気が合つような合わんような感じで、何十年も狸の道を護る為に戦つてきた。その俺を助け続けてくれたんが、トライアンフ…『ゴドネス・オブ・トライアンフ凱旋の女神』」

「はい、よく分かりましたと頷いてレノンは破顔した。

「今こそ、僕はトライと話しにいこうと思います」

頼む、と渡が言つとレノンは右手を机の上へ。

Godness of Triumphの上へと乗せた。

刹那、視界が黒に染まりレノンは武器の世界へと飛んで行く。意識だけの存在となつて。

え、という戸惑いの声が落ちる。

「これ、は

赤の城のどこか一部だろう。似たような色彩と床だ。
眼前には、撒き散らされた白い画用紙。
そしてキャンバスに向かう少女がいた。
真っ白な布で構成されたふつくらとした衣装はそれこそ女神のそれを思わせ、同じく白い紐をベルト代わりにして腰の辺りで縛っている。

「……」

彼女は無言で振り向いて。

「あなたは勘が、いいんですね」

金の長い髪に碧眼、天使のように愛らしい少女の姿に違わず可愛らしい声だった。

「なんでもお見通しみたい。篤実先生や聖さんや、他の皆のことを知らなかつたら、このお城の中でお勉強してもらおうと思つたんだけどな。渡さんの周りの人のことを知らない人と話すの、嫌だもの。でもさつき渡さんの過去で勉強したものね。だからここに直接連れてきつたの」

レノンは暫く驚いていたが、彼女にキャンバスを示されて声を思わず漏らす。

「あ……それは……」

彼女が描いていたのは、渡と仲間の姿だった。

中央に立つのが法師篤実、両脇に聖と初樹がどちらも笑顔で。

初樹は篤実の右腕に己の腕を絡めていて、篤実はそんな彼女に苦笑を見せていく。

初樹の隣で、座っている遊凪の頭をくしゃくしゃと撫でる薰。

止めると言つているのだろう、両腕を上げ彼を止めようとしてやはり笑つていてる遊凪。

聖の隣には三人組がいて、煉喜と切言に挟まれた桐明が年齢につ

りあわないほど幼く純粹な、こぼれそうな笑顔を向けている。

幼い子を護るよう両脇の二人も笑みを見せる。

薰の更に隣に、記憶中の姿で渡と浬がいた。

浬は両手に何やら書物を持つて微笑しており、渡は肩に刀を担いで、珍しいことに確かにその表情は笑みだった。

皆に頭上から、雨の如く降り注ぐのは桜の花びら。

桜の花言葉は、『善良な教育』といつ。そう、絵を描いた彼女が口にした。

「同時に、桜は桐明さんの花もあるの。私が好きだから描いたって理由もあるけど」

とても明るい、楽しい気分になる絵だった。

少女のような彼女の外見に似合わず、精巧な絵でもあった。

素敵な絵です、とレノンが褒めれば嬉しそうに彼女は笑った。

「私はいつもここで、こうして色んな渡さんに関係する絵を描いてる。この絵は、もう少し修正したら完成だよ」

完成した所も見てみたいと思いながら、レノンは言つ。ここまで来た真の目的の為だ。

「僕がここに来た目的のことなのですが、お話ししていいですか？」

その言葉に彼女は頷いて、いいよと言つて筆を置く。

キャンバスからレノンの方へと身体を向けた。

だからレノンは聞く。

「あなたは、昨日の晩渡さんに訊いたところ…最近急に聖さんの魔力が入らなくなつたそうですね。その不調を、僕は治しに来たのです」

その言葉に、あ、と彼女は顔を赤らめる。

「私…」

「ええと、何か心当たりが…？」

「こくん、と少女は頷いた。

「渡さんが、大好きで、それで…」

かあと顔を真っ赤にして告げられた言葉、凱旋の女神が告げるそ

の全てをレノンは聞き届け、覚えて。

「成る程、分かりました。確かに伝えします。西国の騎士達を護る、凱旋の女神よ」

全て聞き終えてそう言えれば、トライは安心したようにぶんぶんと縦に首を振った。

幼い笑みが浮かぶ。

「ありがと。私、あなたに会えてよかったです。
僕も、あなたに会えてよかったです。
そう、レノンは笑った。

凱旋の女神は思い出す。せんぱい千刃鶴と呼ばれ、無双の強さを誇る主と歩んできた日々を。

多くの怪我をした主を癒しきれないこともあった。

護りきれないこともあった、それでも。

それでも主は感謝してくれた。

俺の強さはお前のおかげや、と。

主は友と共に西国で戦つようになつて、多くの部下に囲まれるようになつて。

そうして、そのうちに自分が西国支部の女神と呼ばれるようになつた。

飛び続ける鶴を天より守護する女神。

そう、呼ばれるようになつた。

ともそれは幸せな事だつた。

武器としてはなく、彼のパートナーとして認められたよつで。
ともとも、幸せ。

凱旋の女神の記憶は主の姿と共に、大きな幸せに満ちたものだ。

回帰の感覚。レノンは再び帰つて来て、閉じられた瞳を開く。

「ただいま帰りました。ありがとうございました、トリイ。確かに伝えるよ」
そう言つて、一度鎧を撫でた。

「嫌に早かつたな。俺と渡さんが話す時間も無いぐらいだぞ?」
驚いたようなジョシュアに、笑つてレノンは頷く。

「渡さんに記憶を見せて頂いたのがよかつたみたいで。捜す必要無く、彼女から僕を呼んでくれましたから」

さて、とレノンは座り方を直して。

「彼女の不調は、多分簡単なことで治りそうです。えっと、僕が不調に心当たりはと訊いた時の彼女の答えをそのまま口にしようと思います。僕のような男が口にするとちょっと気持ちが悪いかもしませんけど。…トリイは金の長髪に青い瞳、白い…天使のような衣を着た、可愛らしい少女ですからその辺りを考慮しながら聞いてください」

ああ、と渡が返したのでレノンは始めた。

「『渡さんが大好きで、それで…渡さんの役に立てるだけで嬉しいのに、でも…他の武器達が手入れとかよくしてもらつてるのに、私はあんまりそれが無くて。護り刀だから痛むことが少ないんだから当たり前なんだけど、でも羨ましくて。なんだかもやもやした気持ちになつちゃつてた。だから、それが多分影響してるんだよ。渡さんを一人占めしたいような気持ちになる。悪い子だよね、私。でも、大好きなの』」

一度言葉を切つて。

「つて、こういう感じなんですが…どうしました?怖い顔で」
眉をひそめ、レノンを睨むように見る渡。

「……なんやその痒うなりそなのは」

「だつてトリイがそう言つたんですもん」

あはは、とジョシュアが笑う。

酷く彼は面白そうだ。

「お医者様でも治せない恋の病つてか」

レノンが肩を竦め。

「でも、解決はある意味簡単でしょう。渡さんがトリイのことを大切にしてるって、ちゃんと示せば解決すると思います」「さあ、どうするか考えてくださいね?」とレノンに言われ、渡は複雑な表情で溜息。

「……女は苦手や。記憶で見たやろ、初樹つていう縁の女……つて女は一人しか出でないか」

ええ、と頷けば心底嫌そうな顔で。

「アレがとんでもない女でな。他にもとんでもないのしか周囲におりんかつたから、完全にトラウマや」
さてどうしたものか、と頭を抱え、そして暫しあつて顔を上げた。苦笑の表情。

「帰つてから、俺より頭のええ上司に聞いてみる」

それで、と聞く。

「輪風はさつきお前がトリイのところに行つてる間に受け取つた」
指差された机には、確かに輪風朱姫の包みがあつた。

そのまま渡は右手でそれと、トリイも一緒に拾い上げて。

「それで、涅が早う帰つて来いつて言つてたから帰ろうと思つけど報酬はなんや? 菓子か?」

遊戯の時の話を聞いていたのだろう、そう聞いてきた渡にレノンは返す。

「あ、では、お願ひできますか」

一本の指を立てて。

「いつでも構いませんから、出来次第で……」
「刀か剣の魔術武器を作つてもらえませんか。僕とジョシュアにつづつ。勿論、渡さんの魔力を使つたものを。魔力のない僕達でも有するだけなら大丈夫でしょ?」

予想していなかつた答えか、渡は驚いたように目を見開く。
レノンは続けた。

「魔道武器つていうのが、凄くいいものだと思つたんです。だつて鍛冶師と基礎魔力を提供する魔道士、両親が揃つてるんですから」渡はレノンの答えを聞いて、それから僅かに笑う。

「ああ、分かつた。出来次第送る」

ではと別れを告げると一瞬で、その姿は風に包まれ消え失せて。そうして、彼とレノン達とは別れた。

それから、一ヶ月ほど後の話になる。

砂糖・ミルクがどばどばのコーヒーを飲みながら、レノンとジョシュアが語らつていた。

机の上には一つの武器が乗せられている。

一つはとても細身の刃を持つた、短めの剣。

金の茨と青い宝珠があしらわれた優美な物で。

もう一つは刃の幅だけで二十センチもあるかと思われるほどの大剣で、角張った無骨なフォルムと赤い宝珠が特徴的だった。

レノンが同封の手紙を手に話す。

「銘はこっちにあるけど、後で見てよ。名は、僕用の細い方が『ルミネ』、ジョシュアの太い方が『ガルゲルダ』。両方とも、渡さんが作つた武器だから女性名をつけたらしい」

「ガルゲルダか…じゃあ呼び名はガルだな。よろしく」

やーい剣だ、と武器オタク入つた表情でガルゲルダを眺める友。それをちょっと嫌だなあと思ひながらレノンは先を読み進めて、手紙を読んでいない友に聞かせる為に喋る。

「輪風は部屋に置くことにしたつて。それから

ふつ、と表情が緩んだ。

「トライには、あの車輪のよくなつた鍔にリボンをつけてあげたんだつてさ。部下の皆さんや涙さんと話して。結構彼女にリボンをつけてあげるの人気みたい。若い部下の人を中心に、涙さんも加わ

つて…色んな人がつけ替えてくれて、殆ど日替わりの状態なんだつて」

「よかつたじやんか！それって、トリイの世界ではちゃんとトリイ自身がリボンで髪結つてたりすんだろ？」

ちゃんと話を聞いていたらしい友が、そう返すのにレノンは頷く。

そう、武器の体に施した装飾は精神にも影響を与える。

柄に赤い布を付けてもらつたある槍は精神の世界では首に赤いマフラーを巻いていた。

「それでね、その日替わりの方は一本で…もつ一本はずつと同じリボンをつけてるそなんだ。それが…渡さんの髪と同じ、濁つた赤色のリボン。渡さんが自分で買って来て、結んであげた物だつて」レノンには、くるくる替わるリボンと、替わらない濁つた赤色のリボンとで髪を一つにくくり幸せそうに微笑む、小さな女神が見える気がした。

「これからもずっと…渡さんと一緒に幸せに。トリイ。ちゃんと渡さんは、あなたを見ていてくれますから」

(ありがとう、渡さん)

(ずっとずっと、大切にするよ…)

『たそがれにわ黄昏庭』に存在する唯一の国、タソガレ。

そこに一人の青年がいます。

武器と話す青年が。

全ての世界において一人しか持たない異能の彼は

今日も全世界の人々の、問題を起こした武器と話します。

武器、ワラウワラウ

幸せに、苦しんで、楽しく、一人で、想つて
思つて

今日も明日も、お姫さんは絶えません。

だけれどこの物語は、ひとまずここでグットアンドトゥルーエンド。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2161ba/>

武器シリーズ

2012年1月5日20時53分発行